

30287



教科書文庫

3

810

41-1897

20000
67124

M30
1897

Kodak Gray Scale



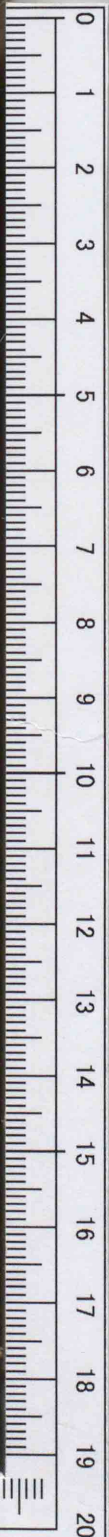
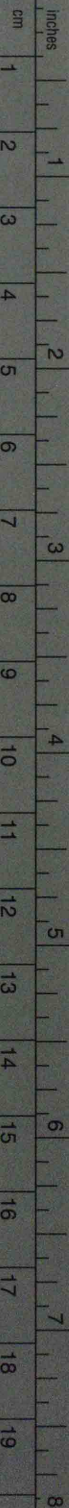
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

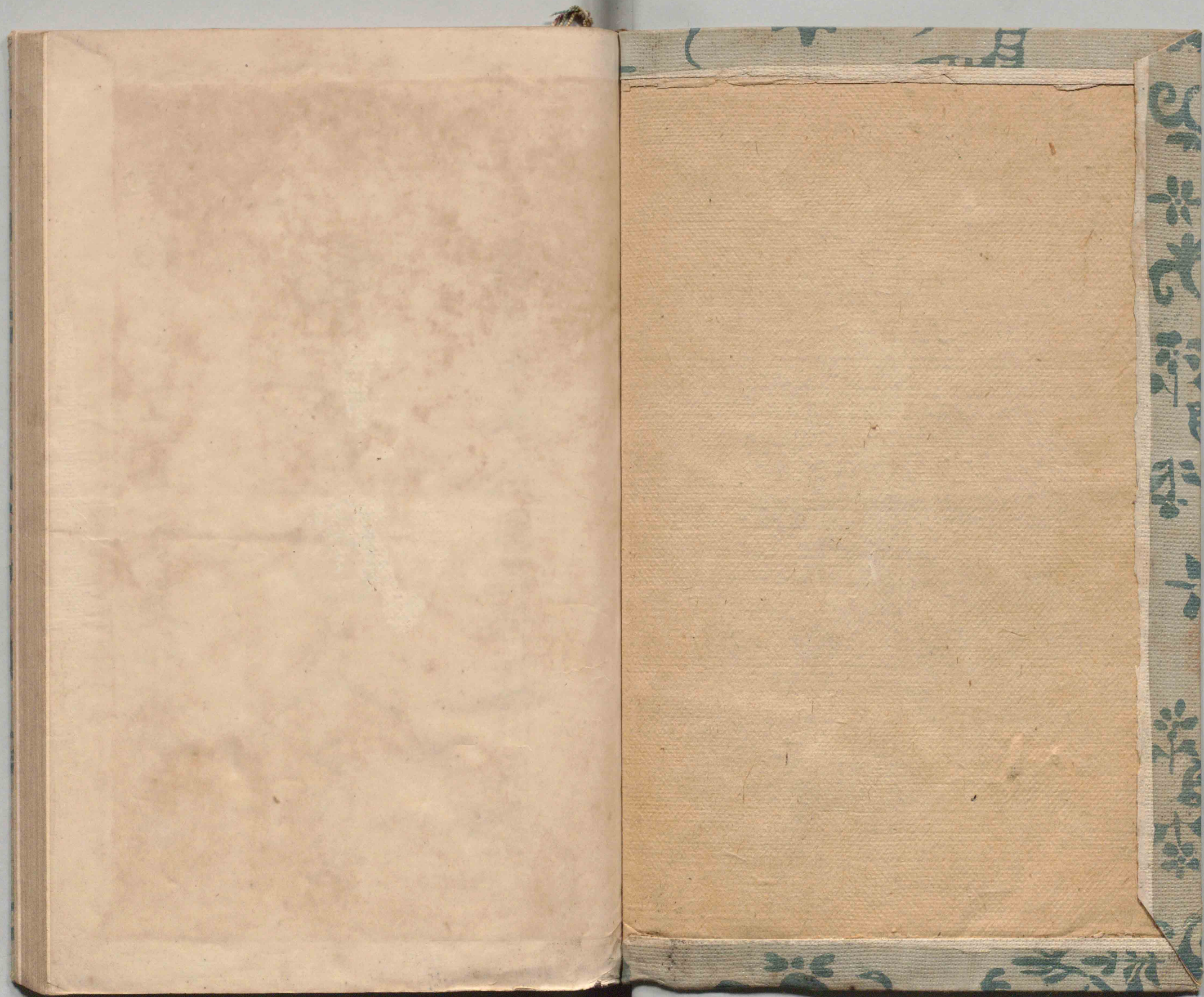
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
明30





4a
810
明30

最新中學校國語科教科用書

中學國文 五の巻

明治三十二年一月十五日文部省検査済



中學國文五の卷

目次

一	大日本	北島親房
二	我が國の武威	藤田東湖
三	尙武の風一	久米幹文
四	尙武の風二	久米幹文
五	聖徳	會澤安
六	新嘗祭	小中村清矩
七	儒者	本居宣長
八	荷田春滿	伴 蒿 蹊
九	塙保己一	伴 信 友
十	勢利の害	中井 翁 庵
十一	にくきもの	齋藤彦麻呂

中學國文五の卷

北島親房

藤田東湖

久米幹文

久米幹文

會澤安

小中村清矩

本居宣長

伴 蒿 蹊

伴 信 友

中井 翁 庵

齋藤彦麻呂

十二	なくてよきもの	松平樂翁
十三	木曾路	池原香榊
十四	求摩川	橘南谿
十五	湊川	藤井高尚
十六	吉野山	貝原益軒
十七	鳳凰堂	屋代弘賢
十八	大江匡房	近藤芳樹
十九	阿閉掃部	室大鳩巢
二十	全漢譯文	大槻磐溪
二十一	安藤直次の豫言	湯浅常山
二十二	細川幽齋	新井白石
二十三	細川忠興の逸事	山崎美成
二十四	戦國の質素	湯浅常山

二十五	寒氣指をおこす	橘南谿
二十六	經濟の意義	佐藤信淵
二十七	算術	榑原芳野
二十八	學問	富士谷御杖
二十九	某學生の卒業を祝ふ	久米幹文
三十	落花を、しむ	久米幹文
三十一	菊をめづる詞	横山由清
三十二	大婚式の賀表	小中村清矩
三十三	岩倉公の逸事一	井上毅
三十四	岩倉公の逸事二	井上毅
三十五	足利學校	日下部勝臯
三十六	秀吉の鶴岡參詣	湯浅常山
三十七	全漢譯文	中井竹山

三十八	秀康舞を見る	湯	淺	常	山
三十九	全漢譯文	大	槻	磐	溪
四十	天明年間京都の火災	町	尻	量	原
四十一	天明年間江戸の暴民一	瀧	澤	馬	琴
四十二	天明年間江戸の暴民二	瀧	澤	馬	琴
四十三	痴漢虎を狩らむこす	雨	森	芳	洲
四十四	上達の道	荻	生	徂	徠
四十五	誠	三	浦	安	貞

中學國文五の卷目次終

中學國文五の卷

今泉 定介 同輯
小中村 義象

一、大日本 北畠 親房

親房、本姓は源、家の名を北畠、又、中院と稱せり。元弘三年従一位准大臣となり、正平九年吉野賀名生野に薨せり。和漢の學に通ぜるのみならず、南朝の忠臣として、世人の知る所なり。

大日本は、神國なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へ給ふ。我が國のみ此の事あり。異朝には、其の類なし。此の故に神國といふなり。神代には、豊葦原の千五百秋の瑞穂の國といへり。天地

開闢の初より、此の名あり。天祖、國常立尊、陽神陰神に授け給ひし勅にきこえたり。天照大神、天孫の尊に譲りまし、しにも、此の名あれば、根本の號なり。こは知りぬべし。又は大八洲國といへり。是は陽神陰神、此の國を生み給ひしが、八の島なりしに依りて、名つけられにけり。又は耶麻土といへり。是は大八洲の中國の名なり。第八に當るたび、天御虚空豊秋津根別といふ神を生み給ひき。是を大日本豊秋津洲と名づく。今は四十八か國にわかてり。中洲たりし上に、神武天皇東征

より代々の皇都なり。仍りて其の名を取りて、餘の七洲をも、すべて耶麻土といふなるべし。唐にも周の國より出でたりしかば、天下を周といひ、漢の地より起りたれば、海内を漢と名づけしが如し。
(神皇正統記)

二、我が國の武威 藤田 東湖

かしこくも、樞原の天皇あらゆる敵を平げ給ひ、神武の御威徳を以て、天の下しるし召されしより以來、皇朝の威世に類なく、磯城の宮の御代には、任那國より貢をさ、げ、豊浦の宮の御代には、

仲麻呂

韓國まで打ち平げ給ひ、皇子には豊城入彦命、日本武尊ましく、將軍には坂上田村麿、安部比羅夫などいふ人々ありて、四方の隈々まで、靡かぬ草木もなく、まつろはぬ夷狄もなかりしが、弘安の年に到りて、忽必烈クビライといふもの、蒙古モウコウより起りて、漢土を奪ひぬる勢につのりて、おほけなくも、神國を攻めむと計りしを、鎌倉の執權北條時宗がはからひにて、蒙古より捧げし使の首を刎れ、まさしく忽必烈を敵になしぬる様を世に示し、防禦のそなへ怠るまじき由を觸れぬれば、天下

の人々、すはや、蒙古寄せ來たらむと待ち設け、又、かしこくも、時の帝、石清水の神に祈り給ひ、御身もて、神國の禍に代り給はむとまで、誓をかけ給ふぞあり難き。上も下もかくの如くなりければ、其の誠、天地を動かし、神の御心に叶ひけむ。蒙古攻め來たりし時に、科戸の風、烈しく吹き出でて、荒浪を起し、十萬人の賊船も、海の藻屑となりはて、纔かに三人ならでは、本國にえ歸らざりしは、實に心地よき事なりき。其の後、豊臣氏、軍を出だして、朝鮮に渡り、彼の王城に攻め入り、王子ま

で擒にし、その威に、明國までも恐れおのゝき、二百年餘の今日まで、朝鮮の貢物絶ゆる事なく、まつろひぬるぞゆゝしき。(常陸帯)

三、尙武の風一 久米 幹 文

國を守り、世をしづむるものは、武にこそありけれ。さるは、神代の昔に、天照大御神の、皇孫尊に天位の御璽とて、草薙劔を賜へるも、武をむねとせよこの神慮なりけり。されば、代々の天皇、この御心をわすれ給はず、反者あれば、親、兵を帥ゐて伐たせ給ひ、あるは、皇后、皇子をして伐たせたまふ。

故に大臣大連も、皆この心をはげまして、仕へ奉らぬはなく、武官、文官のけぢめもなかりき。さて大伴宿禰、物部連の帥ゐつる八十伴の雄の、いやますく、に、ひろごりゆきて、その將帥たるものは、大伴氏の祖のをしへにいへるごこく、山ゆかば、草むすかばね、海ゆかば、水つくかばね、大君の、^位へにこそ死なぬ、のどにはしなじと言あげし、兵士たるものは、東人のいへるごこく、額には矢はたつとも、背には矢はたてじ、かへりみはせじと、言たてつゝ、仕へ奉りけむさまは、さこそご想ひ

やられぬ。當時の兵士は、事なき時は、國所にありて、農に桑にいそしめども、事あるときは、弓やなぐひを負ひ持ちて、いづこ迄も、御軍に仕へ奉る故に、兵と農とのけぢめなく、上はかしこき天皇より、下はいやしき民くさに至るまで、天の下、こそこく、兵にならざるはなし。これ我が國の古の體なり。さるを、孝德帝の朝に、隋唐の法をとりて、制をたて給ひしより、官は文と武とを分ち、兵部省を八省の内に置きて、兵事を掌らしめ、天下の壯丁を四つに分ちて、一を兵士とし、諸國に軍

團を置きて、京師の衛士に、邊地の防人ヤキモリに、さしわけて仕へ奉らしめたり。兵は五人を伍とし、伍二を火とし、火五を隊とし、隊二を旅とし、旅十を團とし、火ごとに、馬六匹を畜はしめて、騎射をよくするものを、騎兵として、其の外を歩兵とし、反者あれば、將軍、副將軍を任じ、これを帥ぬて行き、伐たしめ、かへれば、その兵器を收めて、兵庫に入れつゝ、勳位十二等を設けて、功を賞するを常とせり。こゝに舊き制かはりて、兵と農とやゝわかれぬ。兵士は、僅かに調庸を免すに過ぎずして、別

に恩給あるにあらねば、頗からき役なれども、元
來、武になれたる風俗なれば、利徳のあるなしを
問はずして、弓矢をおひ持ち、太刀をはきて、肥え
たる馬にのらむことを好まざるものなかりき。

(水屋集)

四、尙武の風二 久米 幹 文

さて聖武帝の御時、天下しばらく無事なりしか
ば、天平十一年五月、敕して諸國の兵士をこゝめ
て、三關の國、又、邊要なる、陸奥、出羽、越後、長門、太宰
府管内の國々をのみもこのまゝなるべしと、宣

陸奥、出羽、越後、長門、太宰府管内の國々をのみもこのまゝなるべしと、宣

りごち給へり。されども、この制は、民の心に適は
ずして、たはやすく行はれざりけむ。やがて桓武
帝の延暦十一年五月、二度、敕して、さきの如く、諸
國の兵士をこゝめよとおほせ給へり。且、韓國と
蝦夷とに備ふる外は、いたづらなりと思ぼして、
兵役にいたづく民をやすめ給へるなるべし。さ
れども、昔より、久しく武を尙べる風俗は、頓にか
はるべくもあらず。また、弓馬になれたるもの、
今更に、兵仗をすて、平民と肩をくらぶるを、いか
に快からず思ひけむ。又、この比、朝廷の法令、よろ

づ弛みて、驕奢のみまさりければ、國用たらざる
 故に、下等の官をうりて、つくなふ事の出來しか
 ば、さきに兵をこゝめられし富める民は、京にあ
 らそひのぼりて、衛府の官を買ひたり。かゝれば、
 衛門、兵衛、天下にみちたり。さて名こそは、兵衛、衛
 門とはいへ、身は國處に住みて、あらくしく民
 どもを凌ぐ故に、國司法に勘へて糺さむとすれ
 ば、直に走りて京に入り、あるは徒黨を結びて、國
 司をさへ脅すたぐひ絶えざりければ、三善清行
 が封事に、六軍の羆虎にあらずして、諸國の豺狼

衛門
兵衛
衛府

なりといへるなり。たましく、叛者あれば、源平二
 氏を大將に任じて、家人を率ゐて、討ち平らげし
 め、又は、二氏のおぼえあるを鎮守府將軍に任じ
 て、陸奥、出羽を鎮めしめしかば、諸國の兵士、みな
 二氏に屬つざるものなく、自、家人と稱してはぢと
 せず。其の勢、益、いみじくやありけむ、鳥羽帝の御
 代に、敕して天下の兵士の、二氏につくをこゝめ
 給ひしかども、よにいふ隻手をもて、堤のきれた
 る河水を支ふるに異ならず。又、ほどなく、保元、平
 治の亂起りしかば、四方に兵士を募りて、二氏を

して、これを帥めて、たゞかはしむるにいたりては、專兵權を二氏に委ねつるなり。平氏が、兵と政とを左右に手握りて、白河院をたしなめ奉りしかば、院たへがたくおもほして、源氏の兵をめして、平氏をうたしめ給ひけるに、平氏は亡びたれども、大權の源氏に移りつるも、こそわりなり。後鳥羽院は、これをうれたくおもほして、兵をめしあつめて、鎌倉をうたむとし給ひしに、事破れて、中々に、大權は長く武人にぞうつりはてし。かく昔より、さまざまにうつるひ來し事のさまを思

ふに、是たゞ事にあらず、古より武を專と立てつる國がらなれば、これを尙ふ心、いや深くして、たやすくかはるべくもあらぬを、あながちに、隋唐ぶりの令制におしはめむとしたれども、民の心にかなはざる故に、うつりく、て、終に兵と農と、わかれざりし時の、もこのさまにかへれるなり。おのづからの勢といふべし。さてこの勢をささりて、制をたつるにあらずば、世をしづめ、國を治むる事は難かるべくやあらむかし。(永屋集)

五、聖徳天皇の御事 會澤安

寶祚の隆なること、天地と共に窮なく、天照大神の勅のまゝに、永世まで受け傳へたまひ、日神六合に照臨ましく、て、靈明の徳著しく、宇内に雙なきこと、賤しき臣民の喙を容れむも憚るべきことなれども、古書に見えし大意を取りて、その万一を稱揚し奉るべし。日神、高天原にましく、て、最、民命を重んじ給ひ、五穀の種を求め得て、宣ひけるは、このものは、神見うつしき蒼生の食ひて活くべしとて、これを御田に種まさせ給ひぬ。この後、天位を皇孫に傳へ給ふに及びて、御手づから、

齋庭の穂を授け給ひき。かくの如く、嘉穀を貴び給ふことも、神州は、瑞穂の國にして、万民の食ひて生くべきものも五穀なり。戎狄などの如く、鳥獸蟲魚を以て、食さすべき風土にあらざれば、万民の飢に阻まむことを憂ひ給ひし深仁を申し奉るべきなり。又、日神、始めて繭を含ませ給ひしより、蠶を養ふ道あり。又、この時よりして、布木綿などもありて、万民身の寒を免れしことはなりしなり。されば、今日に至るまで、日神の神靈天にましく、て、蒼生を覆育し給ひ、天孫長く天胤

を傳へ、萬民に君臨せさせ給ふ。天孫は、もこより日神と同一氣にましませば、千百世までも、その本を忘れさせ給はず。踐祚大嘗祭とて、天皇即位の御時、御世々々に一度の大祭ありて、新穀を天神地祇にすゝめ給ひ、又、繪服荒服とて、幣帛をも薦め給ふ。又、年々新嘗の祭とて、新穀を太神宮および天下の諸神にも薦め給ひ、神衣神嘗の祭ありて、別に神衣と新穀とを、太神宮にすゝめ給ふ。これ皆、萬民の爲に、本に報い給はむこの深意なべし。又、祈年祭ありて、時令その序に順はむこ

こを、天下の諸社に祈り給ひ、月次祭ありて、幣帛を諸社にさゝぎ、國家の安穩ならむことを祈り給ふ。大忌祭は、水澤を祈り、風神祭は、沴風を攘ひ、鎮花祭は、疫神を鎮め、鎮火祭は、火患を防ぎ給ふ。かくの如き類、尙多し。これ、本に報い福を祈り、災をばらひ給ふこと、皆、萬民を安からしめむこの深仁なり。されば、萬民の爲に、本に報ゆることも、福を祈ることも、災をばらふことも、皆、朝廷にて、民を率ゐて行はせ給ふなれば、萬民は何事を祈らずしても、只、心を專にして、朝廷を仰ぎ奉らば、

おのづから神意に叶ひ、天人の間、和合して、諸神も守り給ふべきなり。今日、万民の食ふところの米穀は、即、日神の種ゑさせ給ひし嘉穀の繁衍せしなり。衣る所の服は、即、神代に始まりし縫織の業の廣がりしなり。その他の室屋、器財、百物ありて、万民の日用となるもの、皆、神代よりして、歴朝の拮据經營によりて、生ずるものにあらざるはなし。今、この民、日神より賜ひし穀を食ひ、天祖天孫の天業を弘め給ひし仁澤によりて、日用に事かくことなくして、世にありながら、其の徳に報

い奉らざるべけむや。これによりて、古より万民新穀を献り、布帛を供し、雑用の料を納めて、祭祀を助け奉るは、みな、天神に報い奉らむとて、至誠の心より出てたるを、天孫万民の爲に、神と天とを典り、万民はおのが誠を天神に達せむとて、至尊に頼み奉る。至尊は万民の心志を正體に負はせ給ひて、天神に敬事し給ふ。聖恩の大なること、海よりも深く、山よりも高しと申し奉らむも、なほおろかなるべし。
(迪彝篇)

六、新嘗祭

小中村清矩

新嘗祭とは、當年の新穀を、御饌、御酒に造りて、天皇、御親、天神地祇を祭らせ給ふをいふ。この當年の新穀を、食物に造りて、神に奉り、人にも饗し、自も食ふわざは、我が國の、古代の一般の風俗にて、天照大御神も、この御所業ありしより、歴世の天皇は更なり。人民もこの事を行ひし狀、古事記、日本紀、万葉集に載せて明らかなり。されば、毎年、皇宮の中なる、神嘉殿にて、この祭を行はせ給ふ儀は、甚、鄭重にして、古は、大中納言、打拂の箱祭器を執り、參議、辨、御帖な神座昇く等の儀あり。翌辰の

日は、豊明節會トヨアカサを行はる。即、親王諸臣に新穀を給ふ儀にして、五節の舞妓の、庭上に舞曲せしもこの時なりき。いと古くは、大嘗、新嘗の差別なかりしに、後世には、御代の始に行はるゝを、大嘗祭と稱して、殊なる大祀とし、毎年のを、新嘗祭として、恒例の禮典とせり。新嘗祭の由縁、大畧かくの如し。年穀は、殊に、人人、命を養ふ貴重なるものなるが故に、上古より歴世の聖主、まづ、二月播種の時にあたりて、當年の豊熟を天神地祇に祈らせ給ふ御祭を、祈年祭といふ。さて秋獲も過き、冬もや

うやく半なるに及びて、當年の新穀を以て、更にこの新嘗祭あるは、もと蒼生を撫育し給ふ大御心より起りたるものなれば、一般の臣民もまた愛憐の聖旨を崇遵し奉り、神代以來、永遠に傳へ來たりし、一大禮典を欽仰すべきなり。

(陽春廬文集)

七、儒者の皇國の事をば去らずしてある事 本居宣長

宣長は、始、小津氏、後本居と改む。舞臺、又、中衛と稱せり。伊勢松坂の人、享保元年九月歿せり。年七十二。

儒者に、皇國のここを問ふには、知らずといひて

耻とせず。から國のをいふに、知らずといふをば、いたく耻とおもひて、知らぬことをも、知りかほにいひまぎらはす。こはよろづをからめかさむとするあまりに、其の身をも漢人めかして、皇國をば、よその國のごとくもてなさむとするなるべし。されど、なほから人にはあらず、御國人なるに、儒者ごあらむもの、おのが國の事知らであるべきわざか。但、皇國の人に對ひてはさあらむも、から人めきてよかめれど、もし、漢國人のごひたらむには、我はそなたの國のここは、よく知れ

ゞども、わが國の事は知らずとは、さすがにえい
ひたらじをや。もしさもいひたらむには、わが國
の事をだにえ知らぬ儒者の、いかてか、人の國の
事をば知るべきこそ、手をうちていたくわらひ
つべし。(玉かつま)

八、荷田春滿

伴 蒿 蹊

春滿阿豆萬磨 姓は荷田宿禰にして、羽倉を氏とす。
通名齋宮、洛南稻荷の祠官なれども、家を嗣がず。
弟を主とし、自は國學の復古を任とす。神代卷、万
葉集において家學を成せり。契沖と時を同じう

して、是は後輩故、彼の説は去るや去らずや。契沖
は佛者なるうへに、其の人綿密に過ぎて、泥滯せ
るものも、まゝ見ゆるを、此の翁は、一層勝りて説
を立てたり。およそ、元祿年間は、諸道復古の運に
あたりたる時にて、國學を唱ふるは、契師と此の
翁となり。よみ歌は主とする所にあらざれども、
又、凡ならず。
けふみればきのふの淵はあさか瀉汐のみち
ひぞ世の姿なる。
などいさめてたしや。又、中世以後、淫靡風をなせ

るをいきどほりて、生涯、戀歌を詠ぜず。その家集
を見るに、當坐によせ、こひの題をさぐりては、其
の物を雜になしてよめり。たこへば、虎によする
こひを雜によめるは。

仇むくふおもひ巴提使にたぐへては虎もつ
たなきものこそみれ。

日本紀、欽明卷の故事によりてよまれしも、學者
のしわざなり。巴提使、百濟國に使して、虎のため小兒を
殺せ、戀歌をよまれざる方正、最賞すべし。國
の故事なり。戀歌をよまれざる方正、最賞すべし。國
學の學校を京師に開かむさて、官の許をうけ、既

檢校
句當
座設
衆分

に地を東山にトするに及びしが、今の東本願寺
墓地の邊とぞ病
に罹りて年をへ、成らずして終れり。惜むべし。著
述、大やう散失す。自、焼き失ひきさいへり。伊勢物
語童子問、万葉集の鮮などは、彼の家に傳はれり。
神代卷は、家秘にして、門生にあらざればつたへ
ずこなむ。(崎人傳)

九、塙保己一

伴

信友

信友通稱は州五郎若狭の人。本居宣長受後
の門人なり。弘化三年十月京都に歿せり。年七十四。

瞽者職檢校塙保己一は、幼き頃より盲にして、白
黒の色のけぢめだに、心に知らぬ身として、怪し

く書を好みて、人に讀ませ、聞きては、やがて、そら
 にうかべて忘るゝことなく、こゝらの古書をひ
 ろく集め、世にかくれたりける珍書珍書どもをさへ
 に、あまたもこめ出だし、校訂して、これかれのめ
 てたきを、つぎくくに摺本とし、又、百枚にたらぬ
 ばかりの書どもを、千二百七十餘部より集めて、
 群書類従と號けたるを、六百三十卷あまり摺本
 にして、世にあらはし、猶、それに遺せるを、又、前
 も勝るばかり續編とすべくものして、またがま
 への目錄は、早く摺本にして、世に出だせり。また

我が心あきとめぬ
 更科や、徳を
 山の月を照めて
 言の葉の及ばぬ身
 りと目を見ぬ
 千よりや雪は
 お下の出候

古本どもをまじへ考へて、書きこゝのへたる書
 ども、何くれと見えきこえて、とりくめてた
 き中に、公にきこえあげて、纂めたりといふ史料
 は、殊に大きな功になむありける。さてかの史
 料の、宇多の帝の御世をはじめにて、近き御世に
 も及ぶべく志たがまへして、己がなからむ後の
 事まで、よく認めおき、過ぎにし文政五年西暦九月十二日の七月
 九日、八十あまりにて身まかりぬさぞ。あはれ、そ
 のはじめをきけば、常のよるほひ盲にてありつ
 るが、書まなびの道に志ふかく、力を出だせるい

さをによりて、その徒のよき階にすすみ、遂にその長とある職、檢校といふにさへなされて、世をつくせるは、古よりたゞひなき人にこそありけれ。
(比古婆衣)

十、勢利の害 中井 發庵

發庵、一名ハ誠之、播磨の人、大阪に住して、懷徳書院を建つ。竹山、履軒兩儒の父、寶曆八年没せり。年六十六。

讃岐の國にやありけむ。國の守、佛をたふさみ、大なる寺をつくれり。つひえ多かりければ、民いたうつかれたり。あるとき、いみじき僧の老いたるを、守めしつれて寺にのぼり、そこら見あるき

て、此の功德、いかにこのたまふかの僧、眉をひそめ、こは國民の涙もてあらひ、あぶらもて琢けるなり。なにの功德かあらむこたふ。大かた興さめて、はべる男ら、にらみあひていらへするものなし。すゞしき胸よりいふなれば、かゝる事たびたびなれど、守いたく心にもかけず、たふさめり。こなむ。今の世すて人、大やう、かゝるはまれなり。ものまなびして、家をも、國をも、ここのへて見む。さて、出でつかふるかぎりも、家にありし時は、こそ人の、君もいさめず、財をわたくしせしなど聞

けば、いたくそしり罪すれど、出で、位を得れば、はじめのこそば、皆、たがふ。そもく、何ものか、これを去からしむる。勢、これをおさへて、利、これを導けばなり。(不問語)

十一、にくきもの 齋藤彦麻呂

法師の酒に酔ひて、放蕩なること、いひちらしさわげる、いこにくし。醫師の大酒大食にて、吐逆なごして悩む、うごましくにくし。晝の蠅、夕ぐれの蚊。書齋の鼠。納戸の盗人。風烈しき時に、近きほりの火の災、いこくにくし。(傍廂)

十二、なくてよきもの

松平 樂翁

なくてよきものは、日記に晴天かきたる。くすしの髪拙き。歌の枕、こそばよみたる。武夫の美服。寺に鳥かひたる。後室の化粧。盲人の老いて目のあきたる。栗の花。法師の額に墨入れたる。(關の初風)

十三、木曾路 池原香榊

香榊、日南と號せり。長崎の人、御歌所に奉職し、明治十七年夏没せり

木曾といへるは、信濃の國、櫻澤橋より、美濃の國、落合の間をいふ。片平、大奈岐、小奈岐などいふあ

たりより、山のたゞずまぬ、溪のけしき、たゞならず。鳥居たうげき、しより見るがまされる嶺なり。木曾の御坂といふは、こゝなりとぞ。

大君のたかき恵にくらぶれば木曾の御坂もふもこなりけり。

この峠、上り二十町、下り廿五町あり。西の麓、藪原にくんだり、これより木曾川に沿ひて行く。この川の源は、八森山より出で、中山道にそひ、南に流れて、伊勢の國の桑名に至り、海に入る。ゆきく、青木橋をわたる。こゝの丘の上に、木曾義仲の

碑といふが立てり。

こゝより南宮社に至る道あり。その社、巨なる巖のもこに在りて、幾百年へけむと見ゆる檜杉など、多く生ひ茂りて、空をおほひ、かうとくしさいはむ方なし。このほこり、すべて義仲の館の趾なりとて、礎の跡、石垣なども残れり。鹽瀬中原を経て、沓懸村に至る。こゝなむ、かの名にきこえたる、木曾の梯といふ所にて、道の左は千尋の巖そばだち、右は木曾の川岸、目くるめくばかりにさかし。大なる石重りて、川隈にさし出でたるに、岩波

漲りて、白う打ち散るが、片方の淵は、青みわたり
 て、さながら、藍の如く、其の深さ測り知られぬに、
 松杉の年へたるが、日影をさふるばかり、枝さし
 かはして、翠、深く立てるなど、筆にも詞にも、述べ
 盡くしがたきさまなり。

そもく、木曾の路は、大むね、岨のかけぢ、さかし
 き山坂にて、ほのかなる溪あひ、奥深き山里のみ
 にて、見上ぐれば、千尋のきり岸、青く聳えて、空を
 かくし、見下せば、一筋の溪河、白く漲りて、玉をち
 らし、あるは木こりの通ふ細路、嶺よりみねにめ

ぐり、或は筏をおろすながれ、溪より溪にいり、魂
 を驚かす。水の響心をさむからしむる巖の形、か
 の唐人の、山は人の面よりおこり、雲は馬の頭に
 そひて生ずさいひけむも、かゝる所にこそはこ
 思ひ合はさる。まかのみならず、年經し林に風お
 こりて、鳥の聲、ものさびしく、古びたる石に霧ま
 どひて、瀧の音かそけきなど、言ひ盡くすべくも
 あらず。

かゝるけしきは、世に、大かた稀なるを、この道を
 ゆきかふ人は、常になれて、さる所さしも思ひた

らず。豊前の野馬溪、土野の妙義山などを、ここに
ふれて、ここへ、しくいひ出てつゝ、二なきもの
に思ふもすくなからず。それはた、世の常の所に
はあらざめれど、たさへば、扇などにかきたらむ
繪ともいふべくや。このさまは、そのすがた大
にして、たけたかき屏風、横長き巻物を見るこゝ
ちなむせらるゝ。心ある人は、誰も去りたらむこ
こながら、事の序に驚かすになむ。
(美登毛廻敷)

十四、求摩川 橘 南 谿

肥後國求摩川は、九州第一の急流なり。源、遠く那

須、椎葉山、五か村邊より出て、四十里ばかりも流
れたり。殊に大川にて、求摩郡の真中をつらぬき、
求摩の人吉の城下を過ぎて、八代に至り、肥後の
海に入る。予が歸路には、相良の御舟にて、此の急
流を下りぬ。船はもこより輕し、人も纒かに予こ
僕と二人に、船人三人、都合五人乗なれば、飛ぶが
如く、八代まで十六里の川を、わづか二時に下り
着きたり。其の頃は、三月のすゑなれば、春水、殊に
多きに、人吉の御城下、青井の宮の前より、船に乗
れば、送別の人々おびたしく、打ち集まり、名殘

の恨いふもさらなり。高橋、雨森、石田の三士は、猶舟に乗り移りて、酒肴など携へ、纜を解けば、もこよりの急流、見送りの人々は、霞の中に入りて、招く扇もはや見失ひぬ。盃一つふたつめぐらす間に渡わたさいふ所まで下りぬ。人々はつきぬ名残なり。かへりの陸路も遠ければ、こより上りたまへこそすゝむるに、いづくまで限もなければ、人々も襟をうるほして上りぬ。予も志ばし舟をはなれて、又、酒一つふたつくみて別る。是より下、水、逆巻き落ちて、殊にすみやかなり。船はいさちひさ

く、細く作りて、首尾に梶を付けたり。眞逆様に、大岩に流れかゝりたる時、あさばかりの梶にては、船の廻ること遅き故に、さきにも梶を付けたるなり。常に、さきの梶を、第一に動かし居て、岩角を避け、思ふ方に、船をめぐらす。又、中程に梶をもて、一人立てり。是は、舟を前後左右に動かすためなり。此の三人の船人、しばらくも油断せず、舟を操る。浪、殊に逆巻く所にいたりては、舟の兩傍に、高き板を立つ。是は、浪の舟中に入らざるやうにこなり。十六里の間に、四五か所は、至つて艱險の所

ありて、浪の高きここ、山の如く、怒れる岩角、浪の間におびたゞしく、時ち出づかゝる所にては、領主などの通行の時は、瀬越しこて、其の前後四五町、或は八九町ばかりも、船を離れて、山に登り、此の險惡の瀬を越し終りて、又、船に乗り給ふこなり。予はいこ珍しく覺えぬれば、興に乗じて、其の瀬をも船に乗りながら下りぬるが、其の目ざましきここ、筆の及ぶべきにあらず。渡より下つ方は、兩山けはしく峙ちて、峰は頭の上に臨み、流れ殊に迫りて細く、怪巖峨々として、屏風をたゞめ

早登白帝城

朝辞白帝彩

千里江陵一日還

兩岸猿聲不住

輕舟改過萬重山

るが如く、壁をつけたるが如く、龍の騰るがごとく、獅子の踞るがごとく、或は、雜樹影茂れる中に入るかこすれば、松杉森々たる岸に臨む。或は、山吹の散りかゝりたる、躑躅の咲きそろひたる、山櫻の己が梢こあらはれ出でたる、千景万色、眸をめぐらすにしたがひ、兩山、只、走るがごとくにして、李太白が輕舟既過万重山と詠ぜしは、かゝる境にもと思ひいでらる。彼の巫峽の急流は、唐土第一にして、舟の下ること、疾鳥迅雲も及ばずこいふも、いかで是には過ぎむ。予も興に入りて、一

絶句を作る。程なく、八代の井出といふ里につきぬ。誠に、舟中の心よきこと、今も忘れがたし。日向より求麻に入りしも、兼ねて聞きつゝる急流を、船して下るべきためなりけるが、日頃の望足りて、いと嬉し。求麻の地は、極めて深山の中にて、廣大の平地なり。別に、一世界の如く、仙境ともいふべし。他國に出て入る路、日向の嘉久藤口と、此の求麻川筋と、二道のみなり。此の川の傍に、山路あれども、絶險にて殊に細し。されど相良侯にも、東都御参勤の時も、此の川を船にて下らるゝことなり。

家中の面々も、皆船なり。誠に、數百の海上を経て、東武に出づる事なれば、家中の人々も、其の妻子親友など、此の川端に出て、見送の時、殊に、あはれなる事なり。其の時に、船の纜を解くやいな、陸より船の中の人に、水をかくる事なり。舟の人々、笠をへだて、水を防ぐ、此のまぎれに、急流の事なれば、數十町くだり過ぎて、涙をそぐひまなく、はや、見送の人影も見うしなふ事なり。予が發足の時も、其のごこくなりき。誠につきぬ名残に、落ちくる涙、せきかゝれて、取る手さへ、はなちかれ

たるに、水をそゞぎて船を飛ばす、陸地の別に異にして、物いひかはすひまもなく、速かにてよけれど、又、更に心ぼそくあはれなり。(西遊記)

十五、湊川 藤井 高尙

高尙、松の舎と號し、宣長の門人、備中の人、天保十一年八月歿せり。年七十七。

寛政十一年正月廿日、ありあけの月の影しらむ頃、やどりをいで、湊川を渡る。此の川は、むかしは、船のうきねせしさま、歌にもよめるに、今は、まさごのかぎり見ゆ。雨のいたくふりたらむをりにのみぞ、水はなかれぬべき。

叶哉、葉中、
江指、葉上、
め、秋、御、葉、
湊川のまねの床、
野、ゆ、ま、い、せ、田、
田、葉、の、ま、を、唐、
聲

ふれこめし湊は川の名のみにてさゞれのうへをゆく水もなし。

川よりをちの坂本村といふ所の、田の中に、楠正成主の志るしの石あり。その比のいくさぶみに見えたるも、けふこのあたりにて、はらきりて、うせられたるよしなり。此の石は、元祿の頃、水戸の君の、たてさせたまへるなりけり。おもてに、嗚呼忠臣楠子墓といふもじみゆ。くすの木のかれにし跡とおもふより志るしのいしもあはれなりけり。

うしろなる文は、舜水とかいひし、から人のまね
 りをりて、かきけりこそぞ。此の正成主は、いこく
 よきいくさのきみにて、世にすぐれたるいさを
 のありけることは、さらにもいはず。帝につかへ
 まつりて、いこもく、ヨシヤまめやかなりしに、そのこ
 ころざしこげずて、はやくうせられたるは、くち
 をしこも、くちをしきことなりけり。そのかみを
 おもひ出づるに、まらぬ世の事なれど、そゝるに、
 かなしくて、涙のほろく、ここぼるゝを、あやし
 こ、従者どもは見るらむかし。
 (神の御蔭)

十六、吉野山、貝原益軒

よし野川を舟にて渡り、六田に到る。吉野山の麓
 なり。川ばたに、町あり。柳の宿といふ。よしの川の
 うへにのぞめる茶屋あり。けしきよくして、目を
 まるこばしむ。此の所より、よし野山へのぼる。一
 つの坂をのぼれば、右の方に、四手掛明神の社あ
 り。既に花ざかりに見ゆ。やうやう上り行けば、道
 筋に並木の櫻あり。左右の山も谷も櫻多し。われ
 のみならず、またがへりし従者も、目を驚かせり。
 猶ゆけば、吉野の町のすこし下に坂あり。その上

なる道のちまたより見れば、日本が花と名付けしあたりの櫻の花、いさく多くさかりにみゆ。爰に去ばしやすらひて、目をほしいまゝにす。こゝ所にかゝる花有るまじければ、日本が花といふも名にかなへり。明日こそ、心去づかに、又よく見めさて、まづ町に入りて、こゝひは、爰にやどるべきよしをつげおき、奥院の方へ行き、人丸塚のあたりに、ありける僧こ、しばらくかたる。子守社のあたりまでは、花さかりに開けり。それより上の方は、山高ければ、花なほまれなり。

奥院へは、昔、行きたれば、けふは、日くれぬうちに、花多き方へゆかむとて、此のたびは行かて、従者のみのぼりぬ。われは、ひそり、金精大明神の宮居より、坂を下り、如意輪寺の方へゆけば、こゝにも花おほし。それよりかへるさに、吉水院に入りて、去ばらく、堂のうちを見る。屏風の繪などもふるめかしく、かれこれ見どころおほし。それより、宿にかへれば、日すでに没りぬ。吉野山の事は、さきに、大和巡覽記に、くはしく記したれば、こゝに去るさず。あくる日、昨日より、か

ねて、けさの曙の花を見むと思ひし故に、はやく
 吉野の旅のやどりを出て、きのふ期せし所に來
 たりて、立ち止まり、日本が花を見る。この谷か
 しこの峯、目の及ぶ所を眺めやりしに、花、今をさ
 かりにさきて、其の多きこと、いく千株といふこ
 さを去らず。其のけしきのおもしろさ、言葉の及
 ぶ所にあらず。喩をさるにもものなし。もし去ひて
 いは、雪の曙にたこへてむ。それは、ひたふるな
 る銀の世界にて、わきだめなく、目すさまじきの
 みにこそあらめ。
(諸州めぐり)

十七、鳳凰堂 屋代 弘賢

十七日寛政四年十月空晴れ、いこのどかなり。卯のはじ
 めにいでたちて、宇治へ行く。なはてにかかり、大
 佛の前とほりて、深草の里、稻荷山に詣で、ぬかつ
 きつ。藤の森、梅谷、桃山とて、いと廣き岡に、梅桃い
 とおほくあり。かゝる所を、春見ましかば、口々
 にいひつゝ、行く。
 花をみぬ恨ぞおほき梅谷につゞく桃山春な
 らずして
 伏見を過ぎて、豊後橋に出づ。橋は、改造とて、舟に

王勳

て渡る。堤をゆけば、左の方には、六地藏驛、小
 ばた、黄檗山など見ゆ。向島、上島、檳島、橋の小島が
 崎などすぎて、平等院の前なる、菊屋といふ家に
 やどる。此の屋は、川づらにて、庭に松の木あり。む
 かひに、朝日山、頼政道、あなたに比叡山も見ゆ。橋
 寺、通圓茶屋など、まのあたりなり。晝のまは、め
 して、平等院に行く。匡房卿の才學あらはされし、
 北向の門も、跡ばかり草原に残りぬ。扇の芝、鳳凰
 堂、釣殿など見めぐりつ。鳳凰堂は、宇治殿の御願
 にて、扉の繪は爲業、色紙形は堀河大府なり。入木

の道にては、御願所の扉にて、大切なる色紙形な
 れど、近頃、修復して、繪もあらぬものになり、文字
 も、非能書の手にてうつしぬれば、年比のゆかし
 さもうせぬ。されど、字のさま、點の姿など、さすが
 に、もこのまゝをうつしきと見ゆる所もあれば、
 あすはうつすべし。山吹の瀬わたる程、南に院の
 御所山、川中に塔の島、むかひに朝日山みゆ。岸に
 あがりて、橋寺に入る。宇治橋の碑の折れたるあ
 り。忠文の社祀、離宮大神ふしをがみ、惠心院へゆ
 く。伏見院宸翰、惠心僧都の法語一幅、持明院基時

卿筆、惠心院三字の額あり。又、興聖寺にいたる。尊
 純親王芳翰に、興聖寶林禪寺とある額、中院通村
 卿の、當寺再興の記、道元禪師正筆の法語などあ
 り。暮るゝ頃、歸りてふしぬ。夜半に千鳥をきゝて、
 霜こぼる旅寢の枕さゆる夜に川おとすみて
 千鳥なくななり。(道の幸)
 十八、大江匡房、近藤芳樹
 白河院の御比、高麗王、病重きよしにて、本朝に名
 醫ありと聞きつたへ、牒状をおくり、その醫を迎
 へむことをもこめけるに、牒状の文、舊例に違ひ、

文選 白鳥天
 客從遠方 歸我
 雙鴈 許音重
 鯉 吳中 布素青

失禮なりとて、醫師つかはすべからざるに決し、
 時の大儒なるを以て、大江匡房卿に、返牒の草を
 書かしめ給へり。その文の中、雙魚猶難達鳳池之
 波、扁鵲何得入鷄林之雲とぞか、と給ひける。こ
 の雙魚扁鵲の對は、殊なる秀句なりとて、彼の
 國の人までも、稱美したりとぞ。
 陸奥、前九年の合戦の後の事にや。義家朝臣、宇治
 殿へ参りて、戦の間の物語など申しけるを、匡房
 卿きこしめして、器量はかしこき武士なれども、
 猶軍法をば知らぬよと、獨言にのたまひけるを、

義家の郎等、階下よりほのかにきゝて、戰場をば見しこともなき、なま公卿のけやけきここをものたまひて、わが主をさみせらるゝものかな。安からぬこと、義家の出でられたるに、匡房卿こそ、かゝることもものたまひつれど、かたりければ、定めて、ゆゑあることなるべしとて、匡房卿の車にのり給ふ所へすゝみよりて、會釋して、やがて、師弟となりて、學問をせられけり。そののち、武衡が亂の時、金澤城を攻められけるに、一行の雁、來たりて、田面におりむとしけるが、

俄におどろきて、列をみだりて飛びさりけるを、將軍あやしみて、馬の銜をおさへて、先年、大江の卿のをしへ給へる事あり。それ野に、軍の伏すときは、飛雁列をやぶる。此の野に、かならず、敵あるべしからめ手をまはすべしと、下知せられければ、兵卒ども、手をわからちて、四方をこりかこみけるに、案の如く、三百餘騎をかくしおきたりけり。兩陣みだれあひて、散々に戦ひけり。されども、かねてさとりぬることなれば、京方ちちて、武衡が軍やぶれにけり。匡房卿の一言なからましかば、

危からましと、言はれけりぞ。かゝれば、匡房卿は、兵法をもきはめ給ひて、八幡殿さきこえたる、さしもの將軍の師にも、ならせ給ひけるにこそ。

(天江匡房傳)

十九、阿閉掃部室鳩巢

秀康卿、越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部さて、武功の譽ありし者を、厚祿にて召し抱へられけり。又、狛伊勢さて、之も國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に、鎧の着そめさせけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧きすることゝをたのみけり。さて

饗膳すみ、いはひの盃に及びし時、伊勢、今日は愚息が鎧の着初にて候ふまゝ、御身の御武功の事、御物語して、彼に御きかせ候へといひしに、掃部いや某が身の上に、御はなし申すべき程の武功は、覚え申さず。されど、御望を黙しがたく候ふまゝ、某一生の中に、武者振の見事なる士を、一人見申して候ふ。その事をはなし申すべし。江洲志津が獄の戦に、暮方に、某一騎、余吾の湖のあたりを引き候ひしに、阿閉掃部が父は、阿閉淡路守とて、明智に、掃部は、柴田方にて、敵とおぼしくて、うしろより詞を

かけし故、馬を引き返し候へば、其の人申し候ふは、今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候ふ。御人體を見うけ、幸ここそ存じ候へ。不肖ながら、御相手になり申すべしとて、すゝみより候ふ故、それこそ、こなたも望む所にて候へとて、たがひに馬を乗りはなし、すでに鎗をあはせむとしけるに、其の人、しばし御待ち候へ、今朝より雑兵おほく突き崩し候ふ故、鎗まごれて候ふまゝ、鎗をあらひ候ひて、御相手になり候はむとて、余吾の湖に鎗をうちひたし、二三遍あらひつゝ、

さらばとて、突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはてゝ、ものゝあやめも見えずなりぬ。其の時、あなたより、又、詞をかけ、もはや、鎗先も見えず候ふ。御残り多くは候へども、是までにて候ふ。御いこま申し候ふべし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す者にて候ふとて、某が名をも承り候ひて、此の後、又、陣頭にて出であひ候はゞ、互に人手にはかゝり申すまじく候ふ。もし又、味方にて候はゞ、わりなく入魂いたし候ふべし。さらばとて、立ちわかれしが、是程、見事

なる武士は、遂に見侍らず。いかゞなりはて候ふにかと語りけるに、其の比、伊勢がもこへ、心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。其の日も來て、勝手に居たりしが、此の物語をきゝて、勝手にりにじりいてつゝ、掃部にむかひて、さても、只今の御物語承り、今更、昔を思ひ、涙をおこしてこそ候へ。その時の御相手になり候ふ青木新兵衛は、はづかしながら、我等にて候ふ。かく申すばかりにては、うきたる事におぼすべく候ふ。さて、その時、雙方の（信りたる事）よろひのおどし、馬の毛色を一々述べ

けるが、一もちがはざりければ、掃部おどるきつゝ、さてく、久しくてあひ候ふこそ、本望に候ふ。さて、手前にありし盃を方齋にさし、之をふるしに、さて、腰のわきざしを抜きてひきけり。それより方齋が名、國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同一祿にて召し出だされけり。とぞ。
（駿臺雜話）

二十、全漢譯文 大槻 磐 溪

磐溪名は清崇、平治と稱し、鴻漸老人と號せり。仙臺の藩儒、明治十一年六月歿せり。年七十八。

越前侯秀康之就封也、聞阿閉掃部爲勳閥之士以

重祿聘之、伯伊勢亦越之世臣也、將爲其子行、擐甲禮、請掃部爲賓、禮畢置酒、伊勢謂掃部曰、今日豚兒擐甲之初、願子語當年武功、以祝兒前程、掃部曰、吾豈有武功可語乎、無已則有一焉、吾嘗見一士武風最可觀者矣、賤嶽之役、兩軍旣散、吾單騎沿余吾湖而退、有一騎呼於後者、回驢接之、則曰、朝來所殪、皆雜兵矣、不幸未遇好敵、觀子儀容、果非凡士、敢請一戰、決輸贏、余曰諾、下馬將交槍、其人曰、請俟之須臾、我槍蟻矣、沒鋒於湖、洗之者三、曰可以戰矣、於是相鬪、雌雄未決、而日已昏黑、乃呼曰、可恨、槍鋒難辨、請

期他日、子爲誰、身是青木新兵也、後日相見、我間誓不付勝負於他人矣、揚鞭而別、吾結髮從軍、未嘗見從容整暇如此之士、言未畢、有青木方齋者、自屏後出、謂掃部曰、側聽吾子語、懷舊之淚、不能自禁、吾子亦不記乎、爾時與君交鋒者、即此翁也、掃部拍掌曰、契濶久矣、今日相遇、何其奇也、乃舉觴屬之、好以腰刀、由此青木之名、顯于一時、侯聞而聘之、與掃部同其秩祿。

廿一、安藤直次、本多正純の滅亡を豫言す
湯淺常山

安藤帶刀直次、物がたりの時、本多上野介正純は、家亡ぶべきなりといひしに、程なく、本多に祿を賜はりけり。人々、直次に、まかしくいはれしに、いかにと問ふ。直次聞きて、後を見られよといふ。後又、下野の宇都宮二十万石を賜はる。人々、又、直次に、我等承り候ふ所へ、くるしうも候はず、再三かゝる事、ないはれそといふ。直次、打ち笑ひ、正純家亡びむ事、近きにありといふ。やがて、正純、國を召し放たれしかば、人々、又、直次に、神智有るが如くに候ふ、いかなる故にかと問ふ。直次、さればこふ、

台徳院殿、關ヶ原の軍の時、木曾路にて遲留の有りしを、正純、是みな、父、正信が仕わざに候ふ。死罪に行はれなば、嗣君の過なき事を人存ずべきよし申し、を、台徳院殿、我が爲にかくまでいひつゝ、仰せられし由、正純聞きて、已が功と思へり。父を死罪にといへる、三千の刑、不孝にまさる事やあるべき。これ家の亡ぶべき理なり。まして、忠を君にいたすは、誇るべき事にあらず。正純の亡ぶる、いと遅かりきとぞいはれける。(常山紀談)

廿二、細川幽齋 新井 白石

丹後には藤孝入道に、年老いたるこ、いさげなきものどもばかり残り居て、はかしく軍すべきもの多からず。されども、入道さる古兵にて、すこしも騒く氣色なく、宮津の城を捨て、田邊の城にたてこもり、かたき遅しと待ち居たり。抑、この入道と申すは、弓矢打物とつて、堪能なるのみにあらず、さらぬ小藝にだに達せずといふことなく、天下双なき多才多能の人なりけり。中にも敷島の道をふかくすきて、古今和歌集の秘訣、こごごこくこの人につたはれり。されば、此の度、我が

三木 あかたがし
いふ むね
むね むね
むね むね

藤孝 あかたがし
いふ むね
むね むね
むね むね

身うち死したらむ後、此の道長く絶えなむこそをかなしみ、城にこもれる初相傳の書ども取りあつめて、大内へ献るこて、
 × 古も今もかはらぬ世の中に心のたねをのこす言の葉
 こいふ一首の歌をそへてぞ参らせける。かくて、丹波、但馬の軍勢、雲霞の如くおしよせ、十重二十重にこり巻きて、火水になれさせめけれども、入道ちつともひるまず防ぎ戦ふ。かくては、此の城中々一時に攻めおこさるべうも見えず。烏丸の

右大辨勅使として、大坂に行きむかひ、輝元、三成等に、勅誼をつたへらる。それ^を和歌は我が邦の風として、天地ひらけはじまりしよりこのかた、百王の今に至るまで、その道、永くつたはれり。しかるに、今いにしへのことをも、歌の心をも知れる人、たちまちにうせなむことも、つとも朝家の歎なり。いかにもして、彼の二位法印が、つゝがなからむやうをはかるべしと宣べられたり。輝元を初として、奉行等謹みて承り、急き早馬をたて、寄手の軍を停む。元より、入道は、今を最期と思ひ

禮記の事
王は如命を云ふ
上はつて命を命
いふは命を命

武元野やしのま
つがふて命を命
命を命の外命

切りて戦ひし程に、寄手たやすく引きて歸らむこと叶ふべからず。此のよし、又、都にきこえしかば、三條西大納言、綸命をふくみて、丹後の國に下向有りて、すみやかに勅に應じ、その城を去るべしとありければ、入道畏りて、普天の下、率土の濱、王土王臣にあらずといふことなしと承る。ましてや、此の微賤の身、かくまのあたり寵渥の辱をかうぶるをや。さりながら、入道の年わかき時ならむには、弓矢さる身のならひなり。あへて死を白刃の際に決して、深く恩を黄泉の下に感ずる

こともありなまし。今は齡すでに傾きぬ。たこひ、
 この戦に死ぬることなからむにも、餘命またい
 くばくぞや。されば、をしかるまじき身なる故に、
 私の名譽をむさぼつて、いかで、王命にはそむき
 まぬらすべきと答へ奉りて、やがて城を去りて、
 高野山にぞ趣きける。(藩翰譜)

廿三、細川忠興の逸事

山崎美成

細川忠興は、父の幽齋にも勝りたる行狀多かり
 けり。後に豊前小倉の城主たりし時、一歳領分、大

に早魃して、一向に作もなく、農民ども、餓死に及
 ばむとしけり。
 その旨、役人どもより訴へ、さふあたりての饑の
 みにあらず、來年の手當も、心もこなしと申しけ
 れば、忠興大に、心痛せられ、なかく、尋常の事に
 ては行き届くまじとて、かねて、幽齋より相傳せ
 られし、名物の茶器を、残らず、近臣に持たせ、京都
 につかはし、此の品質物に入れ、金子借用し、火急
 の難を凌ぎ申したくおもへども、それほどの事
 にては、なかく、行きこどくまじければ、よるし

く相手をさがして、残らず、賣り拂ひ候へこのことにて、急ぎ上京せし所、望むもの多しといへども、名高き品々にて、天下の珍器なれば、後難のほどを恐れて、所詮おもてむきにて、買ひ求むるには、去かじとて、所司代板倉氏へ伺ひたるに、周防守聞かれて、その茶器の由緒は、何れにもいたせ、當時、歴々の細川家所持にて、賣り拂はれ候ふことあることには、別條これなき事なり。所望の者は、勝手次第に買ひ取るべし。代金のこと、相濟みし上にては、我等も、一覽すべし。名のみ聞きおよび

たるばかりにて、今まで見ざりしに、幸の事と、申されしゆゑ、さては、氣遣なしとて、有徳なるものども、争ひて求めけり。その金子を、いそぎ大坂に持ち行き、米麥をはじめ、何によらず、食料になるべき品々を、金子限り買ひ調へ、船にて、小倉へ廻し、残らず、領中へ分けあたへしゆゑ、大勢の者ども、飢を助かりけり。となり。このこと、諸國にかくれなく、申し沙汰して、誠に、國の守たる人の、手本なりとて、今に、猶、この忠興のこゝを賞美しけり。とぞ。されば、その仁政の餘慶にや、加藤肥後守の

領せし跡を、この人に賜はりけり。
 これによりて思ふに、古、宣化天皇の勅に、黄金萬貫ありとも、飢をいやすべからず、白玉千箱も、何ぞよく冷を救はむやと宣へるは、いとたふさし。誠に、食は、天下の本なり。かゝれば、古昔、祈年祭にて、朝廷に、豊年を祈る神事あり。それ耕すもの勉めざれば、國倉盈たず。かくては、將相の位にあるものも、強からず。功烈を成すことあたはず。富國強兵の道も、是に外ならずといふべし。
(提醒紀談)

廿四、戰國の質素 湯淺常山

井伊掃部頭^{孝直}大坂冬陣に、物見二人をやる。雨に濡れて歸りければ、様子を聞きて後、則、着られし小袖二つを脱ぎて、兩人にやられけり。さて安藤帶刀^直へ、小袖を貰ひに遣し、我等、かやうの事に、着るもの二つながら家來に遣し、着替なしにて、帶刀の贈られし小袖を着て、革袴にて、權現様の御前へも、度々出でられけり。今、この世を以て見れば、三十万石の身代にて、着替のなかりき。といふは、あまりなることと不審する人もあれども、おほやう其の節のありさま、かくの如くな

りしなり。權現様、大坂夏の御陣に、御旅所御用意の事、仰せ出だされしに、膳米五升、干鯛一枚、味噌鯉節にて事足るべし。味噌も多く持たすなご上意ありし由。かやうになければ、武備はかつてはかゆきがたき事なるべし。掃部頭、かやうに質素なりけれども、彦根は、湖上より、船にて都にゆくに便よかりしかば、大平の後、彦根の士ども、大に驕り、風俗あしく、衣服美麗になりしを、掃部頭いたく憂へて、儉約にかへさむごし、江戸より歸る時、木綿の衣服を、供の士の數ほど用意し、彦根

へ到着の朝、俄かにくばり與へて着せられけり。彦根の家中、旦那を待ち受けに着かざりて、迎に出でけるに、供の士一同に木綿なりしかば、不審する所に、旦那掃部頭、いかにもよごれたる木綿の衣を着られ、駕籠の戸を開き、それ〴〵に言葉をかけられけり。家中の人々、己が身を顧み耻ぢて、美麗なる衣服も引き裂きたき心地したり。夫れより、人、質素になりけりといふ。戦國の時、衣服質素なる事、論を待たず。瀧川左近將監一益、關東の管領として、厩橋に至る時、諸將對面の爲、來た

りしに、只今、一つある衣服の垢つきたるを濯ぎて、赤裸にて候ふ程に、志ばらく待ち給へといひし事、語り傳へたり。これも直孝が衣二つ、物見の士にあたへて、着替のなかりし話と、符合したり。泰平に及びて、やゝ衣服の美になりしかども、寛文の頃まで、尙、其の遺風あり。然れども、金銀利倍の物語する事は、士の耻と心得居たりけり。酒井雅樂頭忠清、大老たりし時、江戸の殿中にて、春の末にや、休所にて、下に着たる服の汗づきたるを、欄干にかけたるが、所々へ、つぎあてたるが、見く

るしと、歸りて語られしに、其の事を司りし老女の、時移りて、君の奢りたまふにこそ、わが一生は、今の如くにて事足りなむといひし事あり。此の事は、嚴有院殿の御時なり。古の武士は、大やう無用の奢侈を縮めて、用ふべき事には、吝ヤカガならざりしなり。關ヶ原一戦の後、成瀬吉右衛門は、伏見に在り、其の子、隼人正、駿府に在りけるが、折節、父の許に金を贈りけり。居間の天井に釣り置きて、客來たれば、あれ見給へ、肴を調味せよとて、隼人が贈りたる金なり。是れを見れば、美味に勝れりこ

ぞかたりける。大坂冬陣和平の後、隼人が子何某
祖父の所に來たりければ、此の度は事故なけれ
ども、やがて事あるべし。其の時、よき馬をもこめ
よ、江戸廣しといへども、金二十枚の馬は、さのみ
多からじ、これをさて、二人の孫に、各、金二十枚を
あたへたりきといふ。昔の士風想ひやるべし。

(常山紀談)

廿五、寒氣指をおとす

橘 南 谿

北國の人、あまりに寒氣をこらへ、雪を侵せば血

凍り、氣のめぐり絶えて、春に至り、少し暖氣を催
す頃、足の指、皆、紫色に變じて、やがて腐り落つる
なり。いかに療治を加ふとも、治しがたきものな
り。余も、此の病人を度々見たりしかども、やはり
脱疽の種類なるべし。いかに寒氣甚しければ、こ
て、指の落つるここやあらむと思ひすて、居た
りしが、北地に嚴寒に遊びて、其のまことなるこ
こを知りぬ。人のみならず、畜類までも、指の落つ
るここあり。出羽の國、秋田領の内、大葛村の鶏、ひ
こ年、寒氣強かりし冬、庭に追ひ放し置きしに、其

の翌春に至り、鶏の足の指、こころく腐り落ちぬ。鶏の命は、恙なくて、今に存在すれども、足の指なければ、枝に栖むこころならず。たゞ庭にのみあつまり居るなり。是れも亦珍しき事といふべし。すべて、いかなる寒國といへども、指の落つるは、足の指の事なり。手の指の落つる事はあらず。我が輩、南國に生れて、かゝる寒氣は、聞きも及ばぬ事なるを、あけくれ、雪の中を歩行する幾度か、かくてぞ指も落つべしと思ひしが、不思議に春に至りても、恙なかりしは、神明の冥助ともいふべ

し。是には、はきこて、菅にて編みたる、すね當の如きものを付け、足先は足袋をはき、其の上に爪掛こて、藁にて指先を厚く包みて、其の上に草鞋をはくことなり。身には幾重も、合羽を着し、頭には頭巾の上に、深き笠をきる。頭巾は冬より、春に至り、一日もはなつ事なも。雪深く、道の上、三四尺以上積りたる時は、爪先濡れずして、反りて凌ぎやすし。雪纒かに四五寸ばかりの時、風雨まざりて、道路泥田の如くなる時は、脛までも濡れて、其の爪先、たこひ幾重包みても、雪水透りて、其

のつめたさ、頭迄も徹り、只今もはや足首は切れ
 失せぬべくぞ覺ゆる。横さまに降る吹雪にて、頭
 巾の間より眉ぬれて、其の露、眉毛に氷り付き、眉
 毛の先、白くつらゝの如く下るこゝあり。夕こど
 に、宿屋に着きても、草鞋脚半、其の儘には解けず。
 彼の地の者、其の足、圍爐裏にくべ給へといふに
 ぞ、初の頃は、あやしく、をかしかりしかど、あまり
 に脚半のさけざる故に、教に任せて、いろりに足
 さしくべたるに、火のあつきを覺えず。やゝ暫く
 して、漸々に氷解け、水滴り出で、はじめて、足袋、草

鞋ともにさくべし。わらじのこほり付きて、石の
 如くになり、さけざるこゝは、毎日かくの如し。北
 地にては、めづらしきこゝにはあらず。又、あまり
 に氷りたる足を、急に熱湯などに浸せば、血のめ
 ぐりを損じて、足こゝとく腐るといへり。され
 ば、初はぬる湯にて洗ひ、漸々に、あつき湯にて浸
 すをよしとするなり。(東遊記)

廿六 經濟の意義 佐藤 信淵

經濟とは、國土を經緯し、蒼生を濟救するを謂ふ。
 いはゆる國土を經緯すとは、まづ、其の國の國都

より、東西の領分界に至る迄の、度数を測量する
を經と云ひ、其の國の南界より、北界に至るまで
の、度数を測量するを緯といふ。凡、此の經緯を審
かにし、氣候を察し、土性を辨じ、地力を盡くすは、
食物衣類の大本なり。又、蒼生を濟救すは、先、境
内の百姓をして、水旱の患なく、居處の安寧なる
を樂ましむるを濟といひ、各自に、産業を勉勵せ
しめて、食物衣類の餘裕あらしむるを救といふ。
能く、境内の、平原、曠野、山谷、河海、池澤、林藪を經緯
して、氣候の寒暖を審かにし、土性の剛柔を察し、

氣候に適ひ、土性に宜き所の諸品を作り、天地化
育の勢力を盡くして、土地に遺利なからしめ、土
農工商、共に、其の職を勤めて、懈怠すること無く、
奢侈することなければ、財用充足して、國家富盛
すること必せり。即、是、經濟の要旨にして、國家に
主たるもの、一日も怠るべからざる急務なり。
もし、それ、此の道を忽にする時は、其の國、必、空虚
し、衣食足らざるに至る。衣食、既に闕乏するに至
る時は、人民五常を守る事能はずして、或は、法の
畏るべきをも顧みずして、惡事をなし、或は、飢寒

に斃れ、或は、離散し、田園荒蕪し、郷里無人の境となるに至らむ。豈、畏れざるべけむや。故に、國君の要務は、經濟の道を修め、邦内を富豊にするより要なるはなく、小民の要務は、其の業を勵みて、衣食を充足するより要なるはなし。小民、孝心あり。雖も、衣食の給せざるに及びては、其の父母を飢寒せしめざる事能はず。國君、仁心あり。雖も、財用の給らざるに至りては、其の百姓を剝奪せざる事を得ず。經濟の一日も怠るべからざる事。以て察すべきなり。(經濟錄)

廿七、算術

榊原 芳野

芳野は、藩藏と稱せり。和漢の學に通じ、文部省に奉職し。明治十四年十二月歿せり。年五十五。

算學の始、詳かならずといへども、上古よりあり。蓋、欽明の朝、曆博士が來たりしより前にも、必、これありしなるべし。其の後、推古天皇の朝、僧觀勒が、曆本を貢せしころは、必、頗、その法を得しなるべし。大寶年間に至りては、其の道やうやく進みたり。と見えて、算博士あり。大學に隸して、專、その學を修めしむ。延喜の頃に至りては、課業も、亦、その數

を増せり。其の後、三善、小槻、兩氏の家學の如くなり、算學の家にのみ、其の法を傳へて、他人は、其の奥秘を知らず。此の道も、文運に従ひて衰へ、名あるものもきこえずなりぬ。

文祿の頃、豊臣秀吉の臣、毛利勘兵衛といふもの算を能くす。其の術を研究せしめむが爲に、明に遣したり。されど、明人、よく遇せざるのみならず、これに其の詳かなる事を傳へず。因りて秀吉に、身卑しく費給らざるを訴へしかば、秀吉、奏請して、出羽守とし、再、これを明に遣せり。

然るに、我が國と明と隙を生じ、秀吉も尋ぎて薨せしを以て、學ぶ所を究むること能はず。歸りて其の業を教授し、遂に死にき。然れども、算法統宗等の書載せかへれるを以て、これより算術復世に行はれたり。其の門に、吉田光由を出だす。頗文學ありしかば、統宗等の書を研究して、塵劫記を著せり。これより、世粗、その術を識りぬ。此の後、徳川綱吉の頃、關新助といふものあり。其の幼き時、家僕の塵劫記を照らして、算を學び、艱澁にして解せざるを見る。新助甫めて十一二歳、かりに

弄ぶこそ一二日、僕を召して、之を教ふ。これより、其の術、愈、進み、發明する所の新術、頗、多し。遂に中興算術の祖となりぬ。門下の者、皆、關流と稱せり。爾後、某流と稱するもの輩出したれど、おほむね、關氏の澤に頼らざるはなし。(文藝類纂)

廿八、學問、吉田富士谷御杖

荀子勸學篇に、小人之學也、入乎耳、出乎口、口耳之間、則四寸耳。曷以美七尺之軀哉。云云。目に見たるも亦去かり。すべて、見聞きたるこそ、さながら用ひたらむは、いまだ、我が物とはいふべからず。美

味の物とても、かまらずしてくらはむに、其の味、いかてか美ならむ。たゞ一言もよくかみ碎きて、わが物としおきて、さてのちこそ用ふべけれ。(北邊隨筆)

廿九、某學校生徒の卒業を祝ふ文

久米幹文

一日もはなるまじき、父母のもこを、遙かにわかれ來て、五年六年の間、京に在りて、物學びするは、おぼろげの志ならめや。さるは、父母の深きめぐみに、こゝらのたからをつひやして、いそしみつ

ためて、この學校の業を卒へぬるは、なかば其の
 志を成しつさいふべし。おのれらだにいさうれ
 しきを、本國にある父母らはいかによるこびつ
 らむ。さて今より、又、専門の學校にいりて、二年三
 歳の日月を過して、まことに業をへむとす
 る、丈夫健男の伴ふ、いそしめや。つとめよや。さて
 も世に學ぶべき道々は、あまたあれども、その要
 を得ずば、かひなかるべし。我が御國の大道は、君
 臣の義を重しとし、父子の親は、これにつぐもの
 とす。この二つの道をささらざる時は、たこひ、千

萬卷の書をよめるも益なし。あやしく妙なる藝
 術をまなべるも、いたづら事なり。然るに、今の世
 人は、西洋の書を、むねと讀むからに、君臣のわい
 だめ、正しからぬ國風にめなれて、天神の正統と
 おはします。我が天皇をも、あだし國の王とひこ
 しなみに思ひこり、又は、かの國の教になづみて、
 父子の道のたふとさき事をも打ちわすれて、たゞ、
 夫婦の外に重んずべき道はなしとやうに思へ
 るもあり。もしかゝる邪なる道にふみまどひて、
 我が直く正しき國風を忘れたらむには、中々に、

學ばざる人におとるべく、はた人をあやまり、國
 をそこなふに至るべし。我が國は、神代より、東の
 海中にはなれ立ちて、君臣のこそわり、はやく定
 まり、父子の親いや深くして、他國人よりは、君子
 の國、禮義の邦といはれつるに、たましく、天下の
 大政、古さまにかへりて、今はこそさらに、大御稜
 威を萬國に示すべき時なるに、世の人心うつけ
 て、しどげなく、氣力なえて、つたなからましかば、
 國人のおもなきのみかは、國家の耻辱ともなり
 ぬべし。されば、丈夫健男のともよ、今より何業を

學ぶとも、いかなる藝を習ふとも、この二道をい
 たゞきもちて、いきのかぎりわすれず、はふらさ
 ず、あはれ、咲きこぼれたる、櫻花の、豊さかのぼる
 朝日ににほふが如く、みやびたる心もちながら、
 ら、人の、神とおぢかしこむ虎をも、手こりにさる
 ばかりなる、やまと魂をふりおこせかし。さてぞ、
 他國人をして、我が天皇を、世界に上なき大王と
 仰かしめ、我が皇國を、世界にならびなきおや國
 とたへ奉らしめさせむ事、豈かたからめや。今
 日の卒業式の序に、あらましごを一言申すに

なむ。

(水屋集)

三十、落花を、しむ

久米 幹 文

春ふかうなるまゝに、ほろゝうつ雉子の聲にお
どろかさされて、おきいでみれば、ひばりの空にた
かくあがるもをか。櫻は、木立にくさげなれば
こ、なにがしのみかどのおほせ言もあれば、垣の
外、うゑなめつるに、梢のゆらく、こ、打ちなびき
たるが、霞のまよりさきこぼれたるは、似るもの
なくめでたし。はた、椿のいろく、にさきつらな

れるは、げに八千代の春をかけつらむとみゆる
に、木蓮の白きも、むらさきなるも、花ぶさのいと
大きくして、ゑみひらけたるは、大君すがたとも
いはまし。山吹のうちしなひて、たをやかににほ
ひたるは、げに妹に似るこいふ名もしるしかし。
きのふけふ、あからめもせで、まもりをれば、人く
人くこなく鳥さへおこづれ来て、うれしきあま
りに、野山の春をもゆかしとおもはず。思ひねの
夢にさへ、おも影にみゆるは、いかにぞめづる志
ならむ。さるを、一夜、風あらましく、雨さへ打ちま

じれば、こはいかにと思ふに、あけはて、みれば、
庭の苔路は、にほへる雲にうづもれたるやうに
て、梢にのこれるは、三つが一つもなし。あさまし
さいふもおろかなりかし。

世の中もかくこそ有りけれ夢のまに

昨日の花はけさの白雪(水屋集)

卅一、 菊をめつる詞

横山 由清

由清は、月の屋桂子の義子、元老院書記官に任せられ、また大學の教
官たりき。博く國典に通じ、著書夥からず。明治十二年十二月歿せり。

君子も慕はしからず。富貴も願はしからず。たと

かくろへて、人に知られず、ゆくまゝに心をやり
て、のどかに、わが世を経なむこそは、めやすく心
やすきわざなるべけれ。さる心になほむ友は、
なぞさいふに、この東の籬のもさにうゑおほし
て、秋深き庭の朝露に、ほこるびそめたる花こそ
はありけれ。此の草よ、春の雪間に、もえ出でそめ
しより、夏も過ぎ、秋も千草のうらかれて、やうや
うさびしく成りゆく頃、初霜おきまふふほどに、
かつた、咲きそめて、霜にかしけず、時雨にうつ
るはず、冬深くさへ匂ひ残りて、花さまの、こども

のにすぐれたるのみならず、にほひ、はた、世にた
 ぐひなう覺ゆるも、植ゑて觀るわが心がらのみ
 にあらじ。世にも、仙人の千世のすみかに生ひた
 つもの、やうにいひて、めでたきためしにする
 なりけり。さればさて、われはその千代にあえて、
 煩はしき仙人のよはひかぞへむこにはあらず。
 たゞ、これにむかひをるほどは、うき世の事は、耳
 にも入らず、南の山にこそはあらねど、のどく
 こ、ながめられて、
 蓮よりもほうたんよりも世の秋を、しらず

詩經小雅
 天保篇
 日月之恒也日之升
 如南山之壽不實
 不斂如松柏之茂
 無不爾或采之

と菊の花ぞうれしきかゝるも、歌と思へるにや
 あらむ。あな、ひかゞしのかたぬおきなや。

(花月新誌)

卅二、大婚式の賀表

小中村清矩

東京早稻田專門
 學校長に代りて

東京市、早稻田町、東京專門學校の校長、教員、事務
 員等、かしこみかしこみて申す。掛卷も畏き、我が
 天皇陛下、天日嗣^尊たるしめし、大御業の始とし
 て、群臣と共に、五條の要件を、神祇に誓はせ給ひ、

立憲の御政をおこさせ給ひてより、公民安く世を過すべき國法を敷き給ひ、行ひ給ひ、教育の詔を下し給ひては、諸人の向ふ所を定めて、ひこしく智徳を進め、武夫を勵まし給ひては、動くまじき、國の守衛となし給へる類すべて、遠つ天祖の神勅に基かせ給ひ、時の宜しきに從はせられ、公民を撫て給ひ、恵み給ふ、廣き厚き大御心に次ぎて、

皇后宮陛下の、後の御政を執り行はせ給ひ、めでたき御事ども多かる中にも、華族女學校をおこさせ給ひて、女子教育の法を正し、赤十字社、慈惠病院に行啓まし、て、厚く病者を勞らはせ給へる如き、古、賢き御跡に從はせ給へる大御心より起れる御業にして、今の蒼生のこよなき幸福なりかし。かく二柱相並びまして、治め給ふ大八洲國內の諸の御民は、畏くも、父母の如く慕ひ奉り、富士が嶺の高く仰き、筑紫の海の深く感^{カマケ}け奉るに、ここの春は、皇后宮陛下の册^{カサ}立まし、てより、廿五年さいふ年に當らせ給ふをもて、この三月の九日を、吉

日良辰と定めて、都よりはじめ、鄙のはてまでも、永き世に例となるべき基を開かせ給へる、御世に生れあへるをよるこびうれしみて、あるは神代覺ゆる相生の松によそへ、または、千代に八千代を重ねたる、鶴龜になぞらへて、こりくとここほぎ奉れり。我が専門學校、はた、聖代の御恩惠により、はやうその業を盛にし、こらの學生を集へて、教授の方法、やうやく備はり、卒業の輩、各その學び得たる道々をもて、名を揚げ、身を立てぬるも、數多かる頃ほひなれば、この御祝典をこ

こほぎ奉りて、いかなる賛辭を申しても、飽き足らざるこゝちすれど、漫なる言の葉をきこえあげむも、なかくなれば、たゞ黙しあへぬ心の誠の、百が一つをだにこほぎこめく言あげして、かしこみかしみも申す。(陽春廬文集)

卅三、岩倉公の逸事一

井上 毅

月日の小車は、めぐりく、て、流るゝ水よりもはやく、故右府公の世を去りたまひしより、今ははや、十年あまりぞ過ぎぬる。

大詔のまにまにく、わが國を不二ふたがねのやすきに置かおてやはまこ、思ひ入りたまへたまる、公の一すぢの誠心は、天地の間にみちわたりにて、きはみなき後の世まで、語りつき、聞きつぐべければ、今更にいふまでもなきことながら、公の逸事の一つ二つを思ひいづるままに、かきしるして、後の鑑あまともし、史人の料にもせむとす。
維新の初に、神武の古に復るといふ、大義を定められしは、この公の、輔翼の力にぞある。碩學、野々口隆正氏の説に、建武中興の振はざりしは、當時

の搢紳に、其の人なきにふれり。源親房卿は、學識ありて、時の帝の御覺もめでたかりしかど、その人の所見は、延喜、天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ、公家武家の間に、隙を生ぜしなれといへり。
故右府公は、搢紳有職の家に生ひ立ちたまひしかど、夙に、大勢を達觀して、王政に、公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐる爲に、神武の古に復るといふ一大義を唱へたまへるは、これぞ、明治の朝廷に、人有りとは申すべき。この一大義

は、百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來の千有餘年間の盤根錯節は、すべて、破竹の勢を以て破れたり。世の人は、明治の中興は、五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて、天平以來の宿弊の、更に破りがたきを破られたることを知るならむ。

徳川氏の大政を返上せし際には、公は謹を蒙りて、久しき間、巖倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄かに召によりて、夜中、参内したまひけり。此の折、公は、一の大囊を携へて、宮門に入りた

まひしが、囊中の文書は、皆、公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる、復古經綸の策案なりき。

此の時、大勢、猶、定まらずして、物論紛々たるに、公は、俄かに躬を以て責に當り、從容應答して、雄藩の主も、爲に容を改め、朝議大に決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は、攝關議奏、傳奏を廢し、親政の洪圖を、旬日の内に定め、後世、動かすべからざる基礎を建てられたるは、實に、公の輔翼の力なり。就中、復古の第三日に、禁

閻に達文を掲げられて、女房の請謁を納るゝことを、痛く禁止せられたるは、是れぞ、數年の宿弊を除き、將來の爲に、一大美事を遺したるこゝて、公の晩年に、親しく物語りし給ひき。此の一事は、扇の要なりと知る人ぞ知るらむ。

玉松操は、一の偉丈夫なりき。平生、聲色を近けず。酒肉を嗜まず。書を讀むを樂こし、夙に、神武復古の説を抱きぬ。偶、公に知られて、蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にし、畫策する所あらしめらる。公は、玉松の功を推して、おのれの初年の事

業は、皆、彼の力なりとまでのたまへり。薨去の前年に、一夕、こゝさらしに、余をめして、玉松の履歷を物かたり給ひ、其の人の績を空しくなせそ、書きまゐりして、後の世の語りつぎの料とせよと、懇懃に仰せられけり。此の夜、余は、他の二人を誘ひて、俱に侍りしが、其の中の一人は、もれなく公の物語を筆に留めたり。おのれの功を推して、人に譲りたまふこゝ、大臣としていさめてたし。

其の後、公の朝廷に勧めまゐらせ、斷然と開國の國是を執らるるに及びて、玉松は、姦雄の爲に誤

られたりこの一語をいひ放ちて、公の許を辭し、召しても應へだにせず。又、一室に屏風をたて籠め、其の中にて、讀書に日を送りけるが、功を論じ、賞を頒つ日に逢はずして、世を去りぬるぞ、歎かはしきと、公のたまひし。公は、蟄居していましながら、其の家の裏の隠れ戸より、人知れず、大久保、木戸、小松、廣澤等の諸名士を引き、内外の大勢を物語られ、此の時、已に鎖國の非なる事を悟らせられつるに、玉松は、露ほども、此の事を知らざりけり。彼れがくちをしく

思ひつるも理なりき。

維新の後、公の翼賛の功は、明治の大御史と俱に後の世に傳ふべきなれば、茲に書きつゝくる要なけれど、公は、おのれの勞を、露ほども、誇りがほに人に語りたまふことなかりしほどに、史人も得知らぬことぞ多かめる。世の人は、明治二十年と、二十二年との條約改正中止の件をば、何某の盡力にて、となりし、かくなりしなど、事々しくいひはやせど、此の事のおこりは、十五年にて、公は、あかず思召すことありて、一方ならず、心を盡く

したまひ、其の折、一たび、中止とはなりぬ。されども、公は深く秘めたまひて、文書一箱ほどもあるを、家に藏めて、内々の人ならては、得知るものなかりき。これ等は、後人の鑑にこそ。
(梧陰存稿)

卅四、岩倉公の逸事二

井上 毅

剛膽は、政事家の第一要徳なりとぞきこゆる。公は、長袖の人とも覺えぬばかりに、剛毅の徳を備へおはしけり。征韓の議、今にも蕭牆の内に、變亂を見むとする時に、陸軍將校の中にて、武勇のき

こえある一人は、公の邸に参り、客室に謁見し、一應、二應、議論の末、其の人怒れる眼、血をそゞぎ、毛髮、倒に豎ち、長き脇差を左の手にて、鞘もたわむばかりに握りつめ、貴殿もし意見を枉げたまはずば、御身の爲あしかりなむと言ひ放ちつゝ、膝と膝との間、一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時、公の家の侍ども、次の間にひかへ居て、障子の隙より窺ひつゝ、あはやと、手に汗を握りたりしに、公はすこしも動ずる色なく、自若として、其の座を守りたまひきこぞ。内の人の物語りし。

公のかしこきあたりの御おぼえ、殊にめでたかりしは、世の人の知る所なるが、大君の御爲ならば、吾を置きて、人はあらじと思ひたまへる、かくさはぬ明き心の深かりしは、是ぞ君臣水魚とも申し奉るべきか。雲の上の事は、筆に載するもかしこければ洩しぬ。

公は大久保故内務卿と、心交、特に深くおはしき。巖倉村蟄居の折より、大久保卿は、密々の往復、頻なりしが、公の身の上、心元なしとて、夜な夜な、年少き侍を遣して、守衛せさせつるこゝありしを、

公は知り給はざりき。西南の亂平ぎて後、兩公の間に契りたまふこゝありしが、日ならざるに、大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に、世の人、大久保の志を知りたらむには、如何ばかりか哀み思ふらむ。維新の初の十年間は、創業撥亂の時なりき。是より後の十年こそは、内治を整理し、民利を進むる時なれとて、將來の爲に、大に計畫する所ありしに、料らずも、かたみの言葉とはなりぬこ。

公は、夙に、開國の國是を唱へたまひつゝ、又、厚く

國體の基礎を重んじたまひ、晩年、公の奏上によ
りて、宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、
祖宗遺制の貴きことを、世に知らせむ爲の計ら
ひこそぞきこえし。

公は、勤儉の二字を、大政の本として、輔弼に心を
盡くさせ給ふ。又、家を治むるにも、儉約を旨とせ
られ、台鼎の高き位に上りたまひし後も、巖倉村
の蟄居の時をな忘れそとて、常に公達を戒め給
ひけり。薨去の前、家範を作り、後の世まで、守り文
にせよとて、子孫に遺し給ひしが、其の附録一篇

は、專、奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にま
しましつゝ、親しく、旨を授けて、侍ふ人に筆執ら
せ給ひし條にぞある。一門の人々が、案文に調印
せしは、七月十五日にして薨去の前、五日なりけ
り。今はの際に、遺言ありて、おのれの墓石は、父君
の墓石の寸法に準へよとありきとなむ。

公は、日に夜に、公の事にのみ心を碎きて、寸時も、
暇あらせたまはざりき。朝五時前には、目を醒し、
侍やあると聲かけさせたまひ、今日は、何某をば、
何時に召せ、次に何某をば何時に呼べ、又、明日は、

何某に何時に來たれ、何某に夕何時に參れとし
るして、申し遣せなど仰せられき。多くの公達は、
父君の代筆として、文かくここに忙しかりきこ
なむ。

公の病に侵されたまひつるは、明治十六年の春
なりしも、後より思へば、十五年の比より、なにこ
なく、あらざらむ後の世の心つくしの節々を、知
る人に語らせたまひしこそぞ多かりける。

同年の冬、ある人の許に、贈りたまへる書の末に、
さりこそとかきやる浦の藻鹽草

たがおりたちてかつぎあぐらむ
とありき。さきだつとも、後るゝも、世の習とはいひ
ながら、御國の爲に、行末を思ひやられし公の心
こそ、いとあはなれ。

公の平生の仰に、大臣たるものは、其の身の進退
によりて、節操を貳つにすべきにあらず。維新の
功臣、晩節を全くせざるものゝ多きぞ、くちをし
きここの極みなる。吾こそ、躬を以て人臣の標準
は示さめこのたまひしが、病重らせたまひし後、
辭表を思ひ立ちたまひしかば、同僚の諸卿が支

へ止めまぬらすをもきき入れず、是非にこそ、歎
 き請ひたまひしかば、上には、忝くも、誠ある意ば
 へを酌ませ給ひ、聞き届けさせ、厚き惠の御勅を
 さへ下したまひけり。かく承りて、公は、さしも
 に重き衾を押し退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜
 謝しつゝ、急ぎ家の子等を召し集へられ、今日こ
 そは、病の輕きを覺えたれ。それ杯まぬれさて、酒
 を賜ひけり。人々、歡の色をなしたりけるが、さて
 其の翌日に、事重らせたまひぬるぞかひなき。今
 はの際まで、夢幻の間にも、公の事のみ、心に掛け

させたまひ、なからむ後の事まで、人もて雲の上
 にきこえ上げまぬらせし事もありきとなむ。
 余は、本末の序もなく、思ひいづるまゝに、書きつ
 かけぬ。あはれ、此の文讀まむ人々よ。なき人のか
 きやりぬる藻鹽草を、彌い繼つぎ々にかつぎあぐべき、
 丈夫ちゆうぶの伴とももなりて、公の地下の靈を、百載の後
 にまで慰めよかし。
 (梧陰存稿)

卅五、足利學校 日下部勝臯

勝臯は幕臣にして、屋代弘賢の親友、考
 證家を以て知られ、又、筆蹟に巧なりき

外門に、學校の二字書ける額あり。明の蔣龍溪が

書けるなり。事ども扱ふ法印、出て迎へて道びきす。聖廟に到りぬ。明の孔廟の圖によりて作れり。こぞ。西階、東階、兩楹の設あり。先聖の像を拜み奉る。坐像にて、幘の狀したる物を冠り、右の御手に、羽扇を取り賜へり。御丈三尺許、前に簠簋豆を連ねたり。左に、子思、孟子、右に、顔子、曾子の木主を置く。又、左の方の一間には、野相公の木像あり。是も座像にて、冠に黒袍なり。右の方に、筮著を立つ。堂を下りて、文庫に行く。古より藏せる書は、櫃に籠めて、黄金もて、葵の御紋おきたる包皮覆ひて、文

庫の中央におけり。法師開きて、書籍を出だす。此の學校は、古、深草帝の御宇、野相公、始めて建て給ひけり。其の學頭をもおきたりとかや。其の後、久しき世を経ぬれば、いつしか廢れ行きて、元弘、建武の後、引き續きて、世の中亂れ、去ばしだに、安き事なかりければ、いと痛く衰へて、在りし佛とも見えぬさまなりけるを、關東の管領、上杉安房守は、其の本性、いと美しく、聖教を尊み、上を敬ひ、下を憐み、世の中をまつりごちけるあまりに、絶えたるを繼ぎ、廢れたるを興してけり。

應仁元年、長尾景久が沙汰として、政所より、今の地に移し立て、明に募り求めて、さまざまの書籍を寄せ藏め、學領を設けられたり。又、武藏の金澤の文庫をも、鎌倉近き所なれば、心ゆくかぎり、取り立て、再、昔に復しければ、二所共に榮えつゝ、國々より、物學するもの多く集ひけり。享保十三年、將軍家、日光山御宮詣せさせ給ひしをり、三十一部の書を見そなはしけり。それより後、みだりに、人に見せぬ事ぞなりぬる。すべて、書寫の本は、李唐の代より前つ方、こなたに傳へ

來しものときこえたれば、二なくめでたきに、まして、宋板の正義は、餘所にありともきこえず。我が國の中に、たゞ一部のものならむかゝるたこしへなき書どもを傳へおきつる、上杉親子のいそしさは、また、たぐひあらめや。年頃、見まほしかりけるを、今日かくしも見たるこそ、いとよるこばしきかぎりなれ。(下野國誌)

卅六、秀吉の鶴岡參詣

湯淺常山

秀吉鎌倉の鶴岡に詣でて、八幡宮の戸を開かせ、

頼朝の像を見られしが、背中を打ち叩き、微賤より出でて、日本を掌に握る事、我と御邊と、二人なり。然れども、頼義父子、鎮守府將軍として、東國の者ども、久しく親みおほかりき。蛭か島より兵を起されしに、關東の靡き從へるも、謂なきにあらず。我は土民の中より、かく日本を思の儘にすれば、功、尚、高しといふべしといはれけり。(常山紀談)

廿七、全漢譯文、中井竹山

竹山は鑑庵の長男、履軒の兄、雪翁と號し、善太と稱せり。文化元年二月大阪に歿せり。年七十五。

關白一日觀於鎌倉、至鶴岡、命啓源頼朝祠龕、直上

蕭之曰、子發於流竄、孤起自行伍、俱不階寸土、而能得志行于天下、但孤爲寒族、子則華胄、故其成功較有難易、是孤所以贏得一籌、雖然、我創業之友、千載唯子、三拊像背而出、聞者嘖嘖稱其磊落。

廿八、秀康舞を見る

湯淺常山

越前秀康卿、伏見にて、國といふ妓女を召して、舞はせられし時、襟に掛けたる水晶の珠數見苦し。さて、物具の上に掛け給ふ、珊瑚の珠數を賜はりけるが、去ばし舞ひける時、頻に涙を流し給ふ。人

人怪しみければ、秀康卿、今天下に幾千萬の女あれども、天下一の女と、世に譽められ、名高きは、此の女なり。吾天下第一の男と、世にいはず。あの女にさへ劣り果てたりと思へば、泣かれぬと仰せありけり。(常山紀談)

卅九 全漢譯文 大槻 磐 溪

天正中、有妓稱阿國者、妙麗善舞、名藉藉於京畿、少將秀康之在伏水、欲觀其伎倆、召致之客館、阿國繫頸以水晶念珠、少將意其品不稱、賜珊瑚念珠以寵之、既而阿國進奏其技羅衣從風、長袖交橫、極其宛

轉之狀、少將凝視者久、因大號泣、左右恠問其故、少將乃曰、渠雖裙釵之流、既爲天下第一名矣、我則堂堂一丈夫、而曾不得稱海內一人、豈能不羞而泣耶、
四十、天明年間京都の火災

町尻 量原

量原は水無瀬流、幼名鑑丸、後兼原と改め、又景兼と改む。從二位兼雄の子、右馬頭兼望の養子と爲る。參議に任ぜられ、從二位に進み、寛政十一

年六月薨せり。年五十八

歲申にあたれば、常に事故ありといへる古諺空しからず。ことし、天明八のこし、戊申正月晦日、曉つぐるそれならで、鐘の聲は、枕をうがらて、南の

方に火有りといふ。人走らせて尋ねるに、建仁寺
 あたりの辻なる小家になむ。程遠ければ、心もこ
 なくも思はず。手あらひ、くしけづり、机により居
 たれば、時うつる程に、大路、頻に騒ぎあへり。はび
 こりけむと見やるに、煙は雲に打ち靡き、風は巽
 の所得て、吹き立つる。焰、河より西に飛びかふま
 らに、若干の町やけぬれば、若きは老たるを助け、
 幼きは母の懷にして、我先にと馳せ迷ふに、ある
 は烟に咽び、或は焰に包まれて、やがて、倒れ伏す
 有様げにあはれにぞありける。東西の河岸、所せ

御用の大臣三位以上
 紫宸殿殿
 皇親四位以上
 位五位以上
 六位以下五位以上

きまで、こゝにや逃れむかしこにやと、火は盛に
 燃えて、灰烟、四方を掩ひ、暮れ行く空も晝のやう
 にて、風なほ烈しく、横ざる雨にふりかゝる。焰は、
 星の落つるが如く見えぬ。あなかしこ、御所あた
 りも心もこなしと、足を空にはせちがふ。公卿、殿
 上人など、殿上のほこりに集りさわぐ。位袍、直衣、
 さまぐに、垂纓卷纓巻さりませめて、ひしめくほど
 に、成過ぐるほど、女院院の御所に火かかりぬ
 と申せば、みなあわてぬ。關白公平内大臣公家孝な
 ど、皆、走り出づれば、やがて、紫宸殿の南階に、鳳輦

行幸(天子)
御幸(天皇)
改行(皇太子)

さしよせ、南門正に開けて、（五九カ）竟龍の光動き出で給
ば、（五九カ）劔璽はもこよりはならずたまはず。供奉の人
々、左右に守り奉りて、やつがれも、この末ざまに
ぞ従ひぬる。賢所は、輦に乗せ参らせ奉りしが、駕
輿丁参りあはねば、人々召し具して、昇き上げ奉
る。あわたしき程ながら、便なき業になむ。風し
きりなれば、笠もこりあへず、供奉の人々、衣冠去
ごごにぬれて、泥は袂を染むるばかりに、あるは
徒跣、或は草鞋して、つかう奉りて、加茂の下の社
にぞ、行幸まししくぬる。風又、變りて、焰、更に燃え

上り、御社あたりまで、照り輝きたり。御留主につ
かう奉る人、息もつきあへず、馳せ参りて、（温明殿）内侍所
紫宸殿など、火かゝれり奏すれば、（七五カ）淺ましく恐
しく、胸つと塞がりて、噎ぶばかりになむ。おまし
も心元なしとて、あわたししく、川より東に促し
奉るに、烟、東に靡き、飛びか（八五カ）ふ焰、袖にさへ落ちた
り。寅過ぐる程、聖護院の宮に行幸まししく、（九〇カ）て、爰
を假の皇居と定めたまひ、賢所も、同宮にぞ入れ
奉りぬる。夜明け行くまゝに、旦の日影、猶けふり
渡りて、火止まざりければ、何處をばかりともわ

きがたかりけらし。倩シテ來し方を思へば、延曆の天皇、都をこの地に遷し、億載ウツクの久しきを祝ひ給へる、不易の帝宅なりしかども、澆季シホキに及びては、世亂れてやけにしこそもあれど、治シホキまれるとき至りては、玉の臺も葎屋ハシラヤも、又、本のやうにぞ造り成せりける、今かしこき天皇、大八洲國しらしめす、惠あまれき御代なれば、仰かぬ者もなからむを、なぞや、騷の出で來ぬる。萬治、寛文、寶永にも、やけたりといふこと、猶耳にあれど、この災の如くは、あらざりけむ。あはれ、大宮、新に雲際に聳えて、千

門、さらにゑみの眉を開かむことをのみこそ。

(天明炎上之記)

四十一、天明年間江戸の暴民一

瀧澤 馬琴

五月晦日天明七年の事にやありけむ。此の夜、戌のころほひに、俠客どもの群れ立ち起りて、麴町なる米商人の店を、理不盡に破却せり。これは、世にいふうちこはしといふ者の、手初テハジメとぞきこえたる。かくて、その次の日より、或は四五十人、或は百數人、一隊となりて、江戸中の米屋の店を破却する。

ここ、日こして間斷なかりけり。初は、夜中、もしくは、早朝のみなりしが、後には、白晝にも、この騒劇あり。その破却する物の響、罵り叫ぶ人の聲、弗撥フハク嵩嵩ソウソウとして、十町の外にきこえたり。予は京橋南傳馬町なる、米商人萬作が店の破却せられし迹へ、ゆくりなく通りかゝりて見けるに、米穀は、皆俵を斫り斷ちて、其の店前に引き散らし、衣類雜具は、箆筒、長櫃を打ち破りて、路上に投げ棄てたれば、ゆくもの道をさりあへず。その米を拾はむとて、貧民の妻、婆々、小女さへ、乞兒共に打ち交り

て、袂に攫みこみ、囊に入る、有様は、耻を知らざるものに似たり。さりこて、制する者もなし。此の頃、小日向水道町にて、豊島屋といふ米商人の、其の店を破却せられし有様を、予が妻の見たりしに、其の事の爲體たゐり、これかれ同じかりきこいへり。この故に、米商人ならざるも、店の様の相似たるは、破却せられしも、往々ありけり。 (兎園小説)

四十二、天明年間江戸の暴民二

瀧澤馬琴

これにより、市の正ただより、與力同心を出だされて、

制せさせたまひしかども、勢あたるべくもあらず。只今、こゝにあるかこすれば、忽然として、鄰町にあり。盗者どものそが中に、年十五六の大童の、いつも、諸人に先だちて、軒に手をかけ、二階に飛び入り、奮撃すること大方ならず。こは人間業ならで、必、天狗なるべしとて、牛若小僧と唱へつゝ、人皆、戦き恐れしが、後に其の素生を聞きしに、大工わらはこいふものにて、かれ十二三の比よりして、身體軽く力あり。常に好みて、梁を渡る者なりとぞ。はじめ、兩三日の程、甲州市尹も、馬を騎り

手抄奉行
勘定奉行
大目付官
老中
若年寄

又其下、同心
世に人見し御
心手具し御
用部屋
老中
若年寄

手抄奉行
勘定奉行
大目付官
老中
若年寄
又其下、同心
世に人見し御
心手具し御
用部屋
老中
若年寄

出だして、制せむとせられしかど、彼等いかに角ひけむ、搦め捕られし者ありともきこえず。其の幾群なる盗者、何處の町の誰が店子とも、定かに知れる者あらず。この故に、うちこはしの奴原あらば、速かに搦め捕るべし。もし手にあまらば、撃ち殺し、斫り殺すとも、けしうはあらずと、いと嚴に町觸れありけり。之により、町々なる家主等、おのおの、竹槍を用意して、夜は暮六より、路次を閉ぢ、店番といふものを輪番せしめ、店中を巡らするものから、もし其の店の米屋が家に、件の者ど

も群れ立ちきて、破却する事あるときは、店番はあわてまどひ、拍子木だもならし得ず。家主は、竹槍を引き提げながら、路次の戸内にふるへ居て、阿容々々として、こはさせけり。此の事、江戸のみならず、京、大坂も、亦、かくの如し。凡、米屋といふ米屋の、米持てるも、持たざるも、破却にあひしは、闕遺なしと、六月の末にきこえけり。こは未曾有の奇事といはまし。かくて、米屋は、名残なく破却せられて、其の事は、いつとなく、凡、一旬餘にして、掻き消す如く鎮まりぬ。
(兎園小説)

四十三、痴漢虎を狩らむとす

兩雨森芳洲

もろこし人のものがたりに、ある人、こもだちかたらひて、山のふもとをさほりしに、此の山に虎ありて、人をくらふ。此の虎をころしたるものあらば、十萬貫を賜ふべしと、榜文たちたるを見て、大にふるこび、うてまくりなどし、そのまゝかけあがらむとするを、かたへの人、ひきこゝめ、いちをしからずやといへば、たからだにもちたらば、いのちは何かをしからむと、こたへたりと

かたりき。おろかなる人のこゝろざし、まことに
 をかしき事なれど、たからあつめするものゝ、人
 のうらみそしりをも、かへり見ず、さかりて入れ
 ば、又さかりて出づる事の、いかほどもい（道、ちやん、ま、つ、り、人、い、ま、つ、り、四、十、二、
 ち、ふ、り、人、ち、やん、ま、つ、り、四、十、二、）てき、つ
 ひにはその身も、あやふくなり、家もほろぶるに
 いたれる。なにか、此のものかたりに異ならむ。漢
 の帝の西園の禮錢をたくはへて、人のこゝろ、日（東、漢）
 々にはなれ、火徳のきゆるをおぼえ給はず、董卓
 が郿塢のこめをあつめて、ほぞのうへに、火こも
 す事をしらざる、まことにいたましきいふべし。

天離
田舎

かゝるゆゑにこそ、たからあつまるべきは民散
 ず。こは、のたまひけめ。（たはれぐさ）

四十四、上達の道 荻生徂徠

士たるもの、上の目きゝに逢ひて、よき役に進む
 にあらざれば、事をあつかひ、人ををさめて、世の
 益となること能はず。されど、非義の計畧を以て、
 進むものは、一旦、志を得れども、其の實なければ、
 つひには黜罰を免れず。たゞ其の身を修め、徳を
 磨きて、天命にまかすべし。中庸に、下位に在りて、
 上に獲られざれば、民得てをさむ可らず。上に獲

らるゝに道あり。朋友に信ぜられざれば、上に獲られず。朋友に信ぜらるゝに道あり。親に順ならざれば、朋友に信ぜられず。親に順なるに道あり。之を身に反して、まことならざれば、親に順ならずといへり。これ進むことを求むる道なり。徳義をよく修め、天性の如くになりたるを誠といふ。故に親の心、其の子を信向し、何事も一味同心して、少しも逆ふ心無きを順といふ。父母親類、すてにかくの如くなれば、朋友傍輩、その人をよく見込み、信向して疑はざるを信ぜらるゝといふ。

かくの如くなる時は、内より積みて外に形はれ、名望いちじるければ、自然に上に達するなり。此の道を棄て、外にすゝみ取る捷徑を求めば、福を得るの道にあらず。(護園餘談)

四十五 誠

三浦安貞

一勺の水を海に入れて、海の水増したりといはむは愚かなり。まさずといふは妄なり。水を加ふる所は我にして、増すと増さざるは、我にあらざるものは、まひて其の辨をもとめずして可なり。我にある處のまことをつくす、これ君子の道

なり。誠とは、うそをいはずる事とのみ心得たらむは、愚かなることなり。ある人、司馬温公に、誠に入る方を問ひければ、妄語せざるより入るこそなる程、妄に語らず、うそをいはず、誠の道には入るなれども、虚言をいはず、誠とはいはずなり。いつはりはいはぬに對する誠は小し。偽なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は、いたりて小さいものなり。地におこせば、目にもかゝらぬ様なれども、内に一つの誠といふものありて、奪ふべからず、隠すべからず、味ますべからず、

覆ふべからず。その時いたるにおよびては、芽をいだし葉を生じ、花を開き實を結ぶ。その子を水に腐らし、火にやきて、芽を出ださずといふは、その子のこがならむや。之によりて、物の子を實といふは、實は則誠なり。一つも誠ならざるものありて、腐れたるものは生ぜず、痛みたるは苗瘁く。人の誠も、尙かくのごとし。昔、衛の靈公といひし君、夜夫人南子と共に座し給ひけるに、遙かに車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過きて、又鳴りけり。靈公誰なるべきかと南子にこ

ひ給ひければ、之は蘧伯玉なるべし、禮に下公門式路馬（蘧伯玉の馬）といふ事あり。忠臣と孝子とは、不爲昭々（昭々たる所）信節不爲冥々（冥々たる所）惰行といへり。蘧伯玉は、衛の賢人なり。夜なればとて、禮を廢せずといひける。靈公、人を使、して見せけるに、果して伯玉にてありける。人知るまじとて、欺くは妄なり。四知といひて、人知らさずと思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る、いかでかおほひかくすべき。たこへば、一升の米、日々に二三十粒をこらむとも、措かむとも、去れざるべし。然れども、久しくおく時はまし、こ

る時はへる。草木も朝見しいるも暮に見る色も、きのふ見しも、けふ見るも、さしてかはらぬやうなれども、誠といふもの、少しの間斷なきゆゑに、いつふころともなけれども、次第に太るものなり。人の見ぬ間とて、間斷あらば、草木も思ふまゝには、のびもすまじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、人なしとて、よく薰り、うつくしく照ればこそ、人至りたる時も、香きよく、色麗はしければ、人の至るを待ちて、香をはなち、色を出ださむこそば、筈にあふことあるべからず。常々心にか

「なき
なそと
人には
いひて
やみな
まし心
のとは
いか
いこた
へんし
といふ
古歌を
誤れる
ならん

て掃灑したらむ座席を、俄かに蜘蛛のいとり、柱ふ
きたらむとは、いかでか見まがふべき。人平生を
たしなまずして、その期にのぞみ、偽に飾らむは、
誠のにはか掃除なるべし。如見其肺肝とて、人欺
くべからず、我が心を欺くなり。
人、偽人にいひてはやみなまし
この歌のごとく、人をば欺くべけれども、心に心
を顧みて、いかに今の如く誠ならざる事をばせ
しぞ。いひしぞ。人をば欺くに、なごて自の心を自

は欺けるを、咎めたらむには、自、耻かしくなり、獨
居ても、頼より汗出づべし。畠山重忠、鎌倉殿の不
審を蒙りし時、偽なき旨を起請を以て、申し上ぐ
べしとありければ、我一生はいつはりをいひし
ことなし。いつはりなしと申す上は、此の事に限
りて、起請をばかくまじとて、終に書かざりしこ
そ、勝れていみじくきこえたれ。人は我意のある
ものゆゑに、一旦我がいひ出でし詞は、たとひ悪
しと案じ當りても、是非にいひ募りて、我を立つ
るものなり。是、腐ちたる實の如し。實といふもの

をもろ探題うしなひたるなり。常式のもの、この意あれば、人に憎み疎せられ、人の主人となり、奉行頭人など、この意あれば、人を破り國をそこなふ。北條泰時、政を去られける時、下總の國のある地頭、領家の代官と相論あり、對決に及ぶとき、領家尤なる道理申し立てける時、地頭手をはたさうち、泰時のかたにむかひ、あらまけやさいひければ、並び居ける人々、一同に笑ひける。泰時うちき、て、いみじくも負けけるものかな。某代官として、久しく成敗しつれども、かゝる事承らず。あはれ、

まけぬときこゆる人も、適はぬまでも陳ずる習なるに、前の一通さもときこゆる所、領家の御代官申さるゝ所、肝心ときこゆるに付き、何事なく、まけ給へる事返すくもいみじくきこえ侍り、正直の人にて御座けりこて、うち涙ぐみ感じ申されければ、始、わらひつる人々は、にがりきつてぞみえける。之によりて、訴論、殊更の僻事もなかりけるにこそこて、まけ様を感じ、六年の未進物、三年迄もゆるしけり。たこひ訴論まけになり、いかなる事にあはむとも、いつはりはいふべから

ずこ、わが心を欺かぬ誠ゆゑ、人をもかくは感ぜ
しなり。(梅園叢書)

中學國文五の巻終

明治廿九年二月十五日第一版印刷
同 廿九年二月廿一日第一版發行
同 廿九年十二月十五日訂正再版印刷
同 廿九年十二月廿四日訂正再版發行
同 三十年一月十五日文部省檢定濟
尋常中學校國語教科用書

中學定價

卷一、二 各金拾五錢宛
卷三、四 各金拾六錢宛
卷五、六 各金拾七錢宛

編輯者

小中村義象

同

今泉定介

發行者

吉川半七

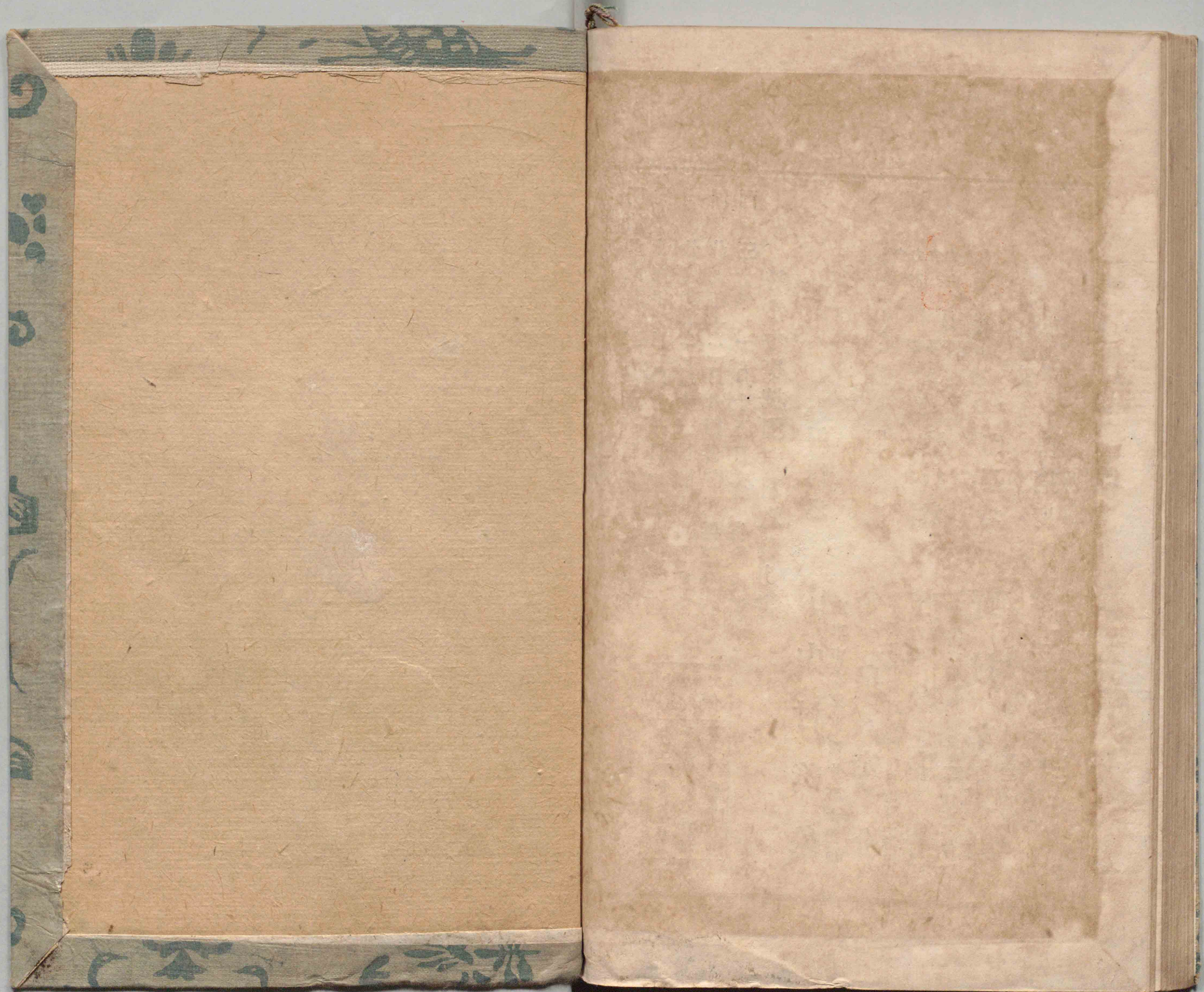
印刷者

野村宗十郎

印刷所

東京築地活版製造所
東京市京橋區築地三丁目十五番地
東京市京橋區築地二丁目十七番地







鹿見
山南北室幌 樽島 本

尾龍城山進白川谷中長大河守
縣 谷本 島南村山崎坪内田
哲泉 振 知 支萬壯
太 商利 書重藤新
郎堂店輔堂店祐吉堂店六介保

(一七)

